故實叢書

武家名目抄

歲時部

卷廿四

192
55

武家名目抄稿二十四目次

第百八十三冊歳時部一之一

門松 二五三三
若水 二五三三
屠蘇白散酒 二五三四
歯固 二五三四
圓覺 二五三五
船繪 二五三五
破魔破魔弓 二五三五
胡鬼板胡鬼子 二五三六
羽子板羽子 二五三六
若菜 二五三七
七草ノ薺水 二五三八
五味粥 二五三九
五節供 二五三九
千秋萬歳 二五三九
萬歳樂 二五三九

第百八十四冊歳時部一之二

子日 二五四一
松囃松拍松奏 二五四一
卯杖 二五四三
三毬打三木ちやう 左義長 散鬼打 二五四三
赤粥 二五四四
御杖 二五四五
具足餅 二五四六
初鮒 二五四七
年始御奉幣 二五四七
御神拜 二五四七
御社參 二五四七
八幡御代官參 二五四八
御所心經會 二五四八
寢殿大般若經 二五四九
御祈始 二五四九
四季御祈 二五四九

第百八十五冊歳時部二之一

殿中遣教經 二五五〇
太刀拭 二五五〇
鏡磨 二五五〇
濱御犬 二五五〇

明治 37 7 1 交内

桃花飯　二五五一
桃花盃　二五五一
鶏合　二五五一
雛祭　二五五二
草餅　二五五二
浴佛　二五五三
蚊帳ツリ始　二五五三
初瓜　二五五三
粽　二五五三
菖蒲蓬　二五五五
紙幟　二五五五
菖蒲兜　二五五五
菖蒲刀　二五五六
菖蒲切　二五五六
菖蒲枕　二五五六
菖蒲莚　二五五七
菖蒲湯　二五五七
薬玉　二五五七
氷堅餅　二五五七
嘉定嘉進　二五五八
六月祓　二五五九
名越祓　二五五九

第百八十六冊歳時部二之一

棚機祭　二五六〇
七種御遊　二五六一
七夕ノ矢　二五六一
素麺　二五六一
生見玉　二五六一
盂蘭盆　二五六三
靈祭　二五六三
盆燈籠　二五六四
蓮飯　二五六四
刺鯖　二五六五
尾花ノ粥　二五六五
初鱒　二五六五
初鮭　二五六五
初雁　二五六五
初鮭　二五六六
初鰤　二五六六
十五夜　二五六六

菊ノ着セ綿　二五六七
菊酒　二五六七
具足祭　二五六七
十三夜　二五六七

第百八十七冊歳時部三之一

火燼開　二五六八
北野御經御成　二五六八
亥子餅　二五六九
ナリキリ　二五六九
ナレキリ　二五六九
マイリキリ　二五六九
玄猪　二五六九
厳重　二五六九
柿餅　二五七五
初鰐　二五七五
富士御精進　二五七六
初鵠　二五七六

第百八十八冊歳時部三之二

一切經會　二五七六
煤拂　二五七六
餅搗　二五七七
大豆打　二五七七
年忘　二五七九
日蝕　二五七九
日待　二五七九
月待　二五七九
子祭　二五七九
庚申待　二五七九
申待　二五七九
御誕生日　二五八〇
御精進日　二五八〇
御精進解　二五八〇
御精進代　二五八一
御衰日　二五八一
御德日　二五八一
御物忌　二五八二
御方違　二五八二
赤ノ日　二五八三
赤後　二五八三

武家名目抄第百八十三冊

稿　檢校保己一編

歳時部一之二

○門松

羽尾記云(中略)上杉景勝ヨリ齋藤攝津守ハ(中略)攝津守大手ノ門ニカト松タテ歳末ノ祝ノ折カラナレハ云々

嘉良喜隨筆云江戸御城ノカサリ竹ハ竹ノ葉ヲトリテ用ユコレハ三河ニテ竹タハ竹ニテ陣中ニテ直ニ被レ成シ例也

又云小笠原ノ家ノ門松ニハシタニシキキノ心ニ柱ヲヲクケハナシヲハスメヅキハ不吉ノ事故ニケハヅシ心ニヒレヲヲクコレ故實ナリ

世諺問答云一日より玄つが家居に門のまつとて江て侍るはいつころはしまれること松たつる事はむかしよりありきたれる事なるへし玄つか家居は大かた封戸なるによつて民戸と申侍れとむかしは一町のうちを五丈つゝにわりて門をたてしかは八の門ありしなりその中に賤か家ゐをつくり侍れは門なかるへきにあらすその門の前に松竹を立侍り松は千とせをちきり竹はよろつ代を契る草木なれはとしの始の祝儀にたて侍るへし

○若水

江家次第云供二立春水一事舊年封二御生氣方人家井一一用之後廢而不レ用レ之自二御厨子所一付二臺盤所女房一供二之於朝餉一土高坏上置二折敷一面押紙大土器盛二立春水一居二折敷一供レ之陪膳居二之於高坏上一一度御飲畢撤レ之

公事根源抄云若水といふ事は去年御生氣の方の井を點して蓋をして人に汲せす春立日主水司内裏に奉れは朝餉にて是をきこしめす也荒玉の春たつ日是を奉れは若水とは申にや

今川大雙紙云御年男きむする事元三にいかにも早天に出仕をして先御やうし二つ奉りてよし長さは六すたるへし是を一つ、かむなかけに置て玄んすへき也其後玄やうしなとを明て御座敷をきよめへき也すみをも置へし御てうつも御年男の役也若水をいつもの御手水のかんにわかして參らすへき也はんそうたらいの中にゆつり葉を置へし玄たを下にゆつりはを上に扨あをめなる石のちいさきを三ツ金輪に置へし十五日迄は何事も御ゆはひ事は御年男

の役也

○屠蘇白散度疫散

延喜典藥寮式云十二月晦日卯一刻宮内省並寮共候二延政門之外一闈司奏訖寮官人率二藥生等一昇二御藥案一相共入置二庭中版南一共以レ次退出省奏訖更入昇レ案退却付二尚藥一但屠蘇者官人將二藥生一同日午時封濱二御井一令二主水司守一元日寅一刻官人率二藥生一就レ井出レ藥卽省輔一人並寮官人等持レ藥共入進置卽用二銀鎗子一煖二屠蘇一（造酒供レ酒主殿殿二火燭一）尚藥執二御盞一率二女孺一昇レ殿令二藥司童女一（殿上平定）先嘗一然後供御次白散度疫散三朝而畢（中宮東宮准レ此）

公事根源抄云一獻にまつ屠蘇を酒に入て藥子にのましむ次に銀器に入て典藥頭とりてはいせんにつたふ主上座をたゝせ給て夜御殿の南の戸より入給ひて御ぬりこめの東のかたの戸にむかひ立せ給へは陪膳御盞を持て參らす是も屠蘇は東の戸に向て飲よし本文あるゆへにや次に女官にかへし給へは是を後取の人にのましむ二獻には神明白散を供す三獻に度疫散を供す如レ此御藥の儀式は三ケ日あり此御藥の儀式は五十二代嵯峨天皇弘仁年中にはしめらる一人是を飲ぬれは一家に病なし一家に是をのみぬれは一里に病なしといふめてたき功能侍れは年のはしめに是をたてまつるにや

年中恒例記云節分之夜白散三箱進二上之一典藥頭仍御會所ノ同朋ニ申次渡レ之云々　一ハ表ノ御酒ニ入一ハ内儀ノ御酒入一ハ四日御ユニ入

年中定例記云正月は白散とて御藥を包たる袋を御銚子のわたりにゆひ付られ候御くはへにはなし

○齒固

江家次第云（供二御藥一餘）内膳自二右青璅門一供二御齒固具一盛二青瓷一大根一坏苽串刺二坏（或説三坏然而撤七坏由有二所見一）押鮎一坏（切盛置頭）煮鹽鮎一坏（同切置頭二串）猪宍一坏（以二鹿代レ之）鹿宍一坏（以二田鳥一代レ之）以上七坏之内精進物供二於第一御臺一魚類供二於二御臺一（或説無鹿宍有二鮑赤一）

吾妻鏡脫漏云嘉祿元年正月八日己巳内々若君御齒固賜之後可レ被レ遣二於何方一哉之由内々有二其沙汰一

西宮記云（供二御藥一餘）内膳供二御齒固一大根苽串刺押鮎燒鮎等付二進物所一進物所例云正月元日早朝供二奉屠蘇御膳一事猪宍二盤（一餅燒押鮎切盛置頭二串）煮鹽鮎一盤（同切置頭二串）但御器者度二内膳瓷盤四口一

鎌倉年中行事云正月十五日ヨリ内々御齒固ノ御祝アリ平人ノ祝ニ圓鏡之樣ニハアラスホソクタカキ御鏡也打衣トテ長五尺斗ニテヒロサ三尺斗ナル衣ニコノリヲ付テ緣ヲ取テ四ノスミヲ總角ヲ綿ニテ結テサケタル衣ヲヒロゲテシキテ其上ニ御ハカタメヲヲキ申ソレヲ御打敷トモ云人有太不レ可レ然

年中恒例記云正月御齒固事當月中以二吉日一行レ之仍日不レ定此次第ノ事先御出座以前伊勢守（打）御祝ヲ御座敷ニスヘナラヘ申ス次ニ御出座アリテ大上臈ハカマ着也御不參ノ時ハ日野殿御酌ニテ三度被二閑召一テ又御退座也其後中臈（ハカマ着用之同ムヲノ守懸）參シテ折敷ノ上ニ臺ヲカサネテ下ニシキタル帛ニテヒキツヽミテ御末ヘ持テ出ラルヽ也如レ此之後常之三盃參テアカリテ御末ニテ伊勢守並諏訪御盃給レ之御服拜二領之一也御酌中臈日取書ハ有春朝臣封シテ諏訪取二遣之一御祝ハ大草調二進之一御倉ヨリノ御下行大草ト伊勢守ト問ノ御手永諏訪也此御祝三ケ日ノ内ニテアレハ先諏訪ニ御對面アリテ御祝マイル也

年中定例記云御はかためとて正月吉日に御祝まいり候ゆき松と申者調進御臺樣へまいる勢州御手長御服下さるゝをり物也

殿中申次記云正月五日（永正十六）御齒固　辰剋御服　伊勢備中守（就二御膳間之儀一被レ下レ之）　同齋藤上野介（就二同儀一被レ下レ之）

蜷川親俊記云天文八年正月五日甲戌御ハカタメ（辰剋）貴殿御ウラウチ御祝奉行諏訪信濃守也

○圓鏡

榮花物語云うへわか宮にもちいかゝみみせたてまつらせ給

河海抄云皇女禎子（三條御宮調白女陽明門院是也）（女三宮母中宮姸子）長和三年五月二日（于レ時二歳）餅鏡御覽是其例也

鎌倉年中行事云正月十五日ヨリ内々御齒固ノ御祝アリ平人ノ祝ニ圓鏡之樣ニハアラスホソクタカキ御鏡也

蜷川親俊記云天文七年正月十九日甲午丹波衆上河高屋將監百疋公文下也爲二代官役一三十疋御鏡菱上樣御方四面也扇二本遣二公文代官一多分也八年十二月廿五日戊子御料所御鏡運二上之一十一年正月十一日壬辰高屋將監三十疋扇遣レ之御鏡道運大上樣親俊御たか岩法師五前備レ之十二日癸巳坂本ヘ御鏡節分祝物被レ下レ之

蜷川家記云永祿五年正月十日　桐野河内代官上レ之御鏡餅進上親長ヘ三十疋十疋上ヘ十疋親長上ヨリ帶二筋遣レ之

○船繪

年中恒例記云節分夜紙ニカキタル舟繪伊勢守進二上之一女中衆同朋衆迄被レ調二申之一

澤巽阿彌覺書云貞孝之御調進節分御舟繪所は一兩年上京

小川扇屋にて被レ書レ之訖又其後狩野法眼弟子に峠左近と申仁御被官人御扶持人候其峠にか、せられ候又其後公方様光源院殿御代に某福山新五郎の時御舟の繪の事公方様朽木より御上洛二條妙覺寺に被レ成二御座一候其時貞孝様は御宿妙連寺と申所に御座候公方様と御臺様は大引合御舟二ッ又御造子御所々々様へ小引合上臈中臈御末女までは杉原に入次第およそ調進或時節分御伺公候て御入候へは御所御所様の御舟不足にて俄に福山繪筆持て參れとの御使被レ下二條春日御局さま御ゑんにて不足の御舟をかき申候節分御舟圖相阿むかしゑづ有それにて調申候事も候し

荻原隨筆云禁裏御寶船は後小松院御夢に御覽して畫せたまふ漠ノ一字則宸翰なりと云カナイトノ黄金ノ釜ノ煤ヲアツメテ板ヲスルト云リ

○破魔　破魔弓

武雜記云正月初に八眼を打小弓にて射事をゆうが八ノ眼色々ニ變し人間にあたをなすはまと名付射る也又はこ板とて五色に色とりはこを打事是ははをまなひ仕儀也

伊勢貞丈筆記云大和國にて正月小兒の戯にはま弓を射る事其的繩を卷て輪を作る徑一尺ほと中に穴あり徑三寸斗なり形鍋敷といふ物のことし是をはまと云小兒並ひ立て右のはまをよろしく走らかして其はまの穴を射るなりこなたよりまろはしやり射てあつるより又まろはし返して射るなり如レ此する事をはまころを射ると云はまころとははまをころはすと云事なるへしころはすはまろはすなりそれを射るをはま弓と云

福山志云□□郡山南村歳首ニ小兒ハマト云物ヲ製シハルカニ抛チコロコロト轉走セシメテコレヲ射ル射ルトキ必伴ヲ分チテ勝負ヲ爭フ負タル兒ヲ罰スルニ則ヲ拜セシムハマハ藤蔓ヲモテ製ス

永祿年中節用集云破魔正月小兒戯具

櫻陰腐談云客問曰正月破魔弓何義也答曰摧二破魔旬一之謂也

○胡鬼板胡鬼子

○羽子板羽子

後崇光院御記云永享六年正月五日朝薄雪降抑室町殿鶴一樋十給レ之毎佳例云々令二祝着一宮御方へ毬杖三枝玉五色々採色こき板二蒔繪置物繪等風流こきの子五被レ進言語道斷殊勝驚レ目了御自愛無レ極

年中恒例記云正月一日御コキノコ臺ニスハル也光雲寺進二上之一日失念也

又云二月一日御所ニ少々御コキイタ以下御二進上之一

又云十二月廿九日一御コキイタ十二箱ニ入閏月在レ之年ハ十三有レ之チリ取一ッハウキノエ二御大工進二上之一棟梁頭モ同前也兩人ナカラ御太刀被レ下レ之御使同朋衆又は御作事之奉行衆

年中定例記云正月十一日比丘尼御所御所御參於二御會所一平家三句あり是は御所御所への御もてなしなり御所御所御みやけはこさいたこきのこ勾具已下御臺様へも同前

世諺問答云おさなきわらはのこきのことといひてつき侍るはいかなることそや答これはおさなきもの、蚊にくはれぬましなひ事也秋のはしめに蜻蛉といふ虫出きては蚊をとりくふ物なりこきのことといふは木蓮子なとをとんほうかしらにしてはねをつけたりこれをいたにてつきあくれはおつるときとんほうかへりのやうなりさて蚊をおそれをめんためにこきのことてつき侍るなり

季瓊日錄云寛正五年正月廿一日被レ覽二猿樂一而賜二羽子板羽子扇子一光爲二寵光一也

忠富王記云文龜三年正月七日御コキ板コキノ子長橋文にてあちや〳〵に給由被二仰出一了

言繼卿記云天文□□年正月七日戊子息女喝食ニ羽子遣レ之云々

多聞院日記云天正四年十二月十六日ハコ板御なへ御かつしきへ下代一斗六斗にて買レ之

永祿年中節用集云胡鬼板胡鬼子小兒正月戯レ之羽子板

○若菜

枕草紙云七日のわかなを人の六日にもてさはきとりちらしなとするに見も去らぬ草を子とものもてきたるを何とかこれをはいふといへととみにもいはすいさなとこれかれ見あはせてみ、な草となんいふといふもの、あれはむへなりけりきかぬかほなるはなと笑ふに又おかしけなる菊の生たるをもてきたれは

つめとなほみ、な草こそつれなけれあまたしあれはきくもましれりといはまほしけれと聞いるへくもあらす

公事根源抄云若菜内藏寮幷に内膳司より正月三の子日是を奉るなり寛平年中より始れることにや延喜十一年正月七日に後院より七種の若菜を供す又天暦四年二月廿九日女御安子の朝臣若菜を奉る由李部王の記に見えたり若菜を十二種供と見えたり此菘の字の事白川院御時師遠に御尋有しかは若松と書てこほほねと讀也若此事にて侍ると申き松をそへて奉るさてはひか事也と上皇被レ仰侍き尋

ぬる事あり其くさ〳〵は若なはこへら苣せり蕨なつなあふひ芝蓬水蓼水雲菘常は若菜は七種の物也薺はこへら芹菁御形すゝしろ佛の座なと也

殿中申次記云正月六日若菜二合松尾社御師仍御太刀被下之同同同

社務

年中定例記云一 正月六日 出仕の人なし 松尾より 若菜進上

祇園執行日記云正平廿年正月六日堀川神人役七種菜沙汰人行心法師持參ナツナクヽタチ牛房ヒシキ芹大根アラメ各方五寸打敷次ニ各入也此外鹽噌各一土器在之

季瓊日錄云文正元年正月六日 郡家村若菜七籠獻之蓋舊例也抑故事有御覽而尙祝義可書進之由被仰出也須智村芹菜二籠獻之蓋舊例也

蜷川親元記云文明十五年正月六日庚子下津屋三郎左衞門尉親信ヨリ若菜五十把大根五十把山芋五十本牛房十把芹二籠遣之嘉例也

蜷川親俊記云天文十年正月五日庚辰桐野河内万石萬貫御供若菜京上

多聞院日記云元德三年閏正月七日若菜祝儀沙汰之

蜷川家記云永祿五年正月五日如佳例万石萬貫神供若菜到來貴殿へ百疋三斗一荷也百疋同一荷

○七草ノ醬水

公事根源抄云正月七日に七種の菜羹を食すれは其人万病なし又邪氣をのそく術に侍ると見えたり

又云七種の粥とは白穀大豆小豆あはくりかきさゝけなとなりと九條右丞相の御記に見えたり

壒囊抄云正月七日ノ七草ノアツモノト云ハ七種ハ何々ソ七種ト云ハ異說アル也不一准或歌ニハ

セリナツナ五行タヒラカ佛ノ座アシナミミナシ是ヤ七種

芹五行ナツナハコヘラ佛ノ座スヽナミヽナシ是ヤ七種

又或日記ニハ齊祭菜五行スヽシロ佛ノ座田ヒロコ是等也ト云々但正月七日七草ヲ獻スト云事更ニナシ

年中恒例記云 正月七日 御ミソウツ 御土器ニ入テ參大草調進之 御コワ供御參候ハヽ御ミソウツモ不參候大草入道說

年中定例記云正月七日内々の御祝の次に七草の御みそうつ參る御こはくも同前

元和日記云元和二年丙辰正月七日七種之糝之有御祝儀事自衆日儒者陰陽寮之博士出家等有御尋仍銘々ニ

以記錄雖獻之其說區々ニシテ不一決又禁裡ヘモ被仰遣所々子之日之若菜又七種之若菜之事書記之被進皆不同也故ニ世俗所用被定式

○五味粥

鎌倉年中行事云正月七日ノ朝御祝同前御椀飯ハ自政所參ル御椀飯同前其夜御五味粥參也

○五節供

式目新編追加云五節供事右充課百姓事可令停止之矣右可停止之由先下知已畢而今地頭面々所申聊非無理歟三月五月七月九月分者一向不可爲地頭口入至于歳末節料者地頭可分取也

新式目云新制條々正嘉三廿三五節供事右充課百姓事可令停止之矣

○千秋萬歳

○萬歳樂

長秋記云天永四年正月十六日應飼下毛野公久空手入中門人々稱似千秋萬歳之由云々

源平盛衰記云民盛被討條抑賞盛石打ノ征矢ヲ負錦ノ鎧直垂ヲ着ル事ハ今度北國ヘ下ケル時内大臣ニ申ケルハ(中略)故郷ヘハ錦ノ袴ヲ着テ飯レト云事ニ侍レハ今度生國ノ下向ニ錦ノ直垂ニ石打ノ征矢御免ヲ蒙リ候ハン且ハ最後ノ御恩也ト所望申ケレハ初ハ免シ給ハサリケルカ既ニ打立所ニ實盛思切タル顏氣色且ハ哀ニ思且ハ軍ヲ勸ム爲ニ内大臣ノ我料トテ秘藏セラレタリケルヲ取出シテ下シ給ヘリ實盛長テ賜テ千秋萬歳ノ心チシテソ着タリケル

東山往來云一日法事之剋貴房召堂預之法師取一枝之花向佛被表白俊家中小男致傍難曰講師御房無持香爐而捧花枝頗似元正千秋万歳之法師云々

花鳥餘情云男踏歌は殿上地下の四位已下の輩えかるへき所々をそゝりてさいはらをうたひまひかなつる事あり是は昔正月十四五日に京中の遊士月に乘してあなたこなたをへめくりうたひ舞しより事おこれり末の代に千秋萬歳といひて逸興をもよほすことある是等の餘風なり

花園院御記云文保三年正月一日千秋萬歳法師等參入亂舞了退出

臥雲日件錄云文安四年正月二日一種乞食輩歳首到人家歌祝言世號之千秋萬歳前后相逐來各與百錢

年中恒例記云正月七日千秋万歳參於松庭被舞之御太刀持被下之同朋遣之御供衆少々伺公

文祿清談云去ル天正ノ末石村檢校ト云盲目アリ此者音律

ヲ手裡ニ握リ諸書ヲ誦ンシ覺悟シテ世ニ鳴ルト云是故ニ公門武家惣シテ不便セサセ給フ增シテ工商富祐ノ者彼レヲ貴ンテ市ヲナス同十八年正月禮賀ノ爲ニ堂上ヘ赴ケルニ此盲者ノ手ヲ引ク者頃田舍ヨリ罷上リテ諸事無下ナリトテ物毎ニ再往念ヲ遣ヒ召仕ケリ今日手ヲ引カスルニ敎ヘテ云ク禁闕堂上ノ御門ヘ入テ若長袖ノ御人體ナラハ我ニ申ヘシ跪キ禮ヲナスヘシト庭訓ヲ含メテ正親町ノ西面ノ御門ヨリ入ル時彼坐頭云テ云此所ヨリ內方樣ハ皆雲上ノ御貴人也アヤシキ人相ノ御方トミルナラハ我ニ告ヘシ貴人堂上ノ御方ハ平人ト衣服モカハリテ長袖也但長袖ト云ニ子細アリ必ス御首ニ物ヲ戴カセタマフ是ヲ則御公家ト云タトヘ長袖ナリトモツフリニ物ノナキハ凡人也ヨクヨク見分テ我ニ知スヘシトクリ返シクリ返シ申ケル扨御門ヲ入トヒトシク彼手引告テ云御申ノ御方樣是御通リ候トサヽヤキケレハ座頭膝行頓首シテ白砂ニ手ヲ突シカシカノ撿校ニテ御座候ト一禮ヲ申ケレト何ノ御答モナシ又使ヲ給リテ御返シト云事モナカリケリ扨如ヽ此シテ下馬スル事一町ノ間ニ十ケ所ハカリモ跪キケレハ終日ノ禮ニハ百四五十所モツクハハセケル間身モヒヘ氷衣モ沙泥ニナリケルトナンカヤウニ夥シク下馬スト云ヘトモ一度モ御詞ニ預ル事ナシ坐頭モ草臥レテモハヤイツシカ手引ト共ニ歸リテケリ扨宿ニテ休息シテ彼手引ニ云ヒケルハ毎年ノ御禮ニハ上方樣ヨリ御詞ヲ下サル、又サホト下馬モセス唯御屋形ヘマイルハカリ也扨々今日ノ下馬ノ事不思議也若汝人違シテ我ニ告ヌルカ又御公家サラハ定メテ同御方ヘ幾度モ禮ヲ致サセケルカ不審也最前ヨリ能々示敎ヘケルニト云ヘハ彼手引カ云フ先剋ヨリ御敎ノ御方ナラテハ御告不ヽ申ト云猶不審ニ覺ヘテ首ニハ物アリヤト問フニ左樣ニ候ト云サラハイヨ〳〵不審ナリ長袖ヲ召シタルニヤト問フニイカニモ長袖ノ大紋ノ帷子ヲ召シ手ニ鼓ヲ持セタマヒ御供ノ人多クハ袋ヲ持タセ給ト云フ彼ノ座頭仰天シテ扨テハ子細ナキ万歳樂ナリ口惜キ事也ト云テ其手引ヲシハラク追籠メケルトナン此事彼座頭カ門弟ヒソカニ人ニカタリテ侍也

藤葉榮衰記云民部大輔濱尾城退出條正月十一日ノ朝民部大輔殿御對面ナリケルハ御出仕ノ粧ヲ刷ヒ登城シ給ケレハ屋形モ御裝束ヲ被ヽ召御廣間ヘ御出在テ同座ニ席ヲ薦メ給フ先ツ年頭ノ万歳ヲ祝シ畢テ御盃ノ上ニ御中直リノ驗ニ御裝束ヲ御脫キ互ニ御取替着シ給フ

武家名目抄稿第百八十四册

塙檢校保己一編

歳時部一之二

○子日

萬葉集云天平寶字二年正月三日召ニ侍從竪子王臣等一令ヽ侍ニ於內裏之東屋垣下一卽賜ニ玉帒一肆ヽ宴于ヽ時內相藤原朝臣奉ヽ勅宣ニ諸王卿等一隨ヽ堪任ヽ意作ヽ歌並賦ヽ詩仍應ニ詔旨一各陳ニ心緒一作ヽ歌賦ヽ詩　始春乃波都禰乃家布能多麻婆波伎手爾等流可良爾由良久多麻能乎右一首右中辨大伴宿禰家持作但依ニ大藏政一不ヽ勘ヽ奏ヽ之也

類聚國史云平城天皇大同三年正月戊子曲宴賜ニ五位已上衣被一庚子曲宴賜ニ侍臣衣被一

文德實錄云天安元年正月乙丑禁中有ニ曲宴一預ヽ之者不ヽ過ニ公卿近侍數十人一昔者上月之中必有ニ此事一時謂ニ之子日態一今日之宴修ニ舊迹一也

庭訓往來云抑歳初朝拜者以ニ朔日元三之次一可ニ急申一之處被ヽ駈ニ催人々子日遊一之間乍ヽ思延引

鎌倉年中行事云正月元日例日タル間御祝等無ヽ之但初子日ニ相當時見好法師參テ種々ノ祝言ヲ申根松ヲ三本持テ參其時評定衆之子共親類ノ間以ニ上意一直垂ニテ松ヲ受取テ扇ニ置テ御二間ノ御妻戸ヨリ十二間ヘ令ニ持參一時松ヲ御請取アッテ被ヽ置也見好法師ハ管領評定奉行ノ亭ヘモマカリ出自ニ公方樣一御祝自ニ政所一下行其外祝言

○松囃　松拍　松奏

花營三代記云應永卅二年正月二日松ハヤシ參西向ニテ仕云々

滿濟准后記云正長二年正月十三日今日赤松左京大夫松はやし令ニ沙汰一御所ヘ參申候仍可ヽ令ニ見物一之由一昨日被ヽ仰間不ヽ及ヽ歸ヽ坊直に震破中門廊ノ棧敷ヘ參了(中略)松はやし午半計歟御前ヘ參申也種々見物驚ヽ目候希有事共珍事々々此松はやし事鹿薗院殿御幼少六歳時播州ヘ御下向時爲ニ慰申一內者共寄合令ニ風流一候其以來今日十三日爲ニ佳例一赤松亭にして年々松はやし令ニ沙汰一來也當年御所ヘ被ヽ召事鹿薗院殿御佳例に依て被ニ仰出一候松はやし悉皆十鼻也以外大儀歟

建內記云永享二年二月一日今日於ニ室町殿一有ニ松拍事一山名右衛門佐入道常熙致ニ沙汰一者也面々見物如ニ先日一風流不ヽ盡者哉奇異云々

又云永享十二年二月七日庚辰今日於二伊豫守宿所一（若君御所也）有二松囃習禮一室町殿渡御云々十一日甲申今日於二室町殿一有二松囃習禮一是近習（第一）幷小番衆沙汰也其外管領（邦二）山名（三）赤松（四）京極（五）於二寢殿南庭一被レ覽レ之十三日丙戌今日禁中東庭有二松囃事一室町殿被レ仰二武家近習幷小番衆一被レ盡二風流一被レ召二進之一又被レ仰二在京之諸大名一同被レ進レ之各於二近所一出立云々先室町殿分次管領分次山名又右衛門佐持豊分次赤松大膳大夫入道性具分次京極加賀入道（實名可レ尋）分於二大名一者自身只着二單物一内々參候子息幷内者等悉沙汰云々被レ垂二清涼殿御簾一出御有二叡覽一室町殿被二祗候一云云

慈照院殿年中行事云正月十四日夜二入亦兩上樣出二御西向一松御庭カ、リニテ松囃（親世舞之見二子役レ之）從二簾中一上覽然後於二同所南方一有二猿樂十番（寛正七御記）

大友興廢記云（大友家年中儀式條）元日より三日まて府内の町よりまつはやしまいるまつはやしとは眉はきたる見あまた裝束を着し鞨鼓にておとる笛鼓大鼓にて拍子あり

長祿二年以來申次記云正月十四日松囃事夜に入て御西向松御庭（御かゝりなり）親世仕レ之御所樣上樣簾中より御覽なり

蜷川親元記云寛正六年正月十四日（壬戌）入レ夜松御庭松囃能有レ之昨被二觸申一御方々御祗候其外管領始御祗候云々

又云文明十五年正月廿六日庚申松囃（北御所御庭）貴殿御祗候

季瓊日錄云文正元年丙戌正月十四日今日殿中御節幷松拍終日御遊宴仍不春也天快晴紅梅數枝獻レ之蓋舊例也

宗五大草紙云毎年正月松はやしの時御臺樣より觀世大夫にこふく唐織物以下十被レ下候御袷はかさならす勢州取次申され候御廣蓋にすはり候大夫御廣蓋ともに取て戴て罷出候又御服はかりを給りて戴ても退出致し候し御服はかりを給たるかよきよしさた候

長祿年中御對面日記云正月十四日一今日は一獻在レ之於二御會所一平家在レ之其後御懸にて松はやし在レ之これは一亂以前の事也

殿中申次記云正月十四日一今日は一獻在レ之於二御會所一平家在レ之其後御懸にて松奏在レ之是は一亂以前の事也

御事始記云正月十四日於二公方樣一まつはやし御座候從二御臺樣一御小袖を十觀世大夫に被レ下御ひろふたに九被レ入候て御母持出られ候て御臺樣のそはに被レ置候さて御臺樣の上にめされ候唐をりの御小袖を御母ぬかせ被レ申候て如レ常たゝみ候て九の御ふくの上にをきて御てに申され候を請取申御前を罷立觀世大夫に遣レ之大夫拜領仕此十の御ふくにて松はやしを仕候て懸二御目一候次に御小袖を御ひろふたに入候次第人の無レ存儀に候歟御小袖に色々高下有レ之事候御母とは伊勢守か妻の儀候御てゝとは伊勢守事候

伊勢貞親以來傳書云一正月十四日於二公方樣一まつはやし御座候從二御臺樣一御小袖を十觀世大夫に被レ下御廣蓋に九被レ入候て御母持出られ候て御臺樣の御そはに被レ置候さて御臺樣の上にめされ候唐織の小袖を御ぬかせ被レ申候て如レ常たゝみ候て九の御ふくの上にをきて御てゝ伊勢守に渡申され候を請取申御前を罷立觀世大夫に遣レ之候大夫拜領仕此十の御ふくにて松はやしを仕候て懸二御目一候次に御小袖を御廣蓋に入候次第人の無レ存儀に候歟御小袖に色々高下有レ之事候御母とは伊勢守か妻の儀に候御てゝとは伊勢守に候

○卯杖

日本書紀云持統天皇三年春正月乙卯大學寮獻二杖八十枚一

文德實錄云齊衡元年正月癸卯諸衛府獻二卯杖一内侍傳レ旨

三代實錄云貞觀元年正月十日丁卯所司獻二剛卯杖一天皇不レ御二前殿一付二内侍一奏

長祿二年以來申次記云正月十五日卯杖進上大館（此子細を堅可二注入一也）殿中申次記云正月十四日（永正十三）御卯杖二大館上總介嘉例進レ之

按、亂後暫〳〵此事たえ永正十三年に至て又進上せしなり

○三毬打（三木ちやう　散鬼打）　左義長

後愚昧記云永和三年正月十四日入レ夜燒二三毬打一十五日朝間又燒三三毬打一十八日左相參内三毬打宛二諸大名等一令レ進レ之

長祿二年以來申次記云正月十四日さきつちうの事及レ晩候て馬場殿にてはやし申也三間御厩の御縁へ御成候て辻こしに被レ御二覽之一すくに常の御所へ還御成候也同十五日爆竹（三毬打共書レ之）此爆竹は今朝御對面相過候て則埦飯より以前の事也御西向松の御庭にてさきつちやう囃申を簾中より被二御覽一候御供衆申次衆庭上に伺公也

佐竹宗三聞書云正月十五日の朝御所にてさきつちやう五本はやさせらるゝと云々同十八日の夜大小さきつちやう三本はやさせられ其あかりにて御的三弓立いかにもふたふたといさせられ候射手は一番と云々細川殿畠山殿又は一色殿一家中也此的を御公事始の御的と申云々

年中恒例記云十二月廿九日一禁裏樣（以二傳奏一御サツキ

チャウ二御玉二進ニ上之一今日日野殿ヨリ參候ヲ則御進上候也

年中定例記云正月十五日御對面以後左義長ほこらかし申御供衆申次衆祗候十八日夜に入て爆竹五本ほこらかす五ケ番より一本つゝ進上

御湯殿上日記云明應七年正月十五日御三木ちやうたかせらるゝ、十八日御三木ちやうとし〳〵のことくたいこくにはやさせらるゝ

殿中申次記云正月十四日永正十三左義長一本囃ニ申之一十五日左義長一本囃ニ申之一被ニ御覽一仍御太刀被レ下レ之十八日三木丁囃ニ申之一

多聞院日記云元龜三年閏正月十四日在家悉散鬼打沙ニ汰之一大旨如ニ初月一云々

又云天正九年正月廿日去十五日於ニ安土一サキチャウ風流事々數儀在レ之色々ノ出立馬ハ惣テ金ニタムモユル火ヘノリ入云々增ハ減ノ基又來廿五日ニ京ノモ結構則信長可レ有ニ上洛一云々

安土日記云天正九年正月八日御馬廻御爆竹之致ニ用意一頭巾致ニ結構一思々之出立ニテ十五日可ニ罷出一之旨御觸有云云

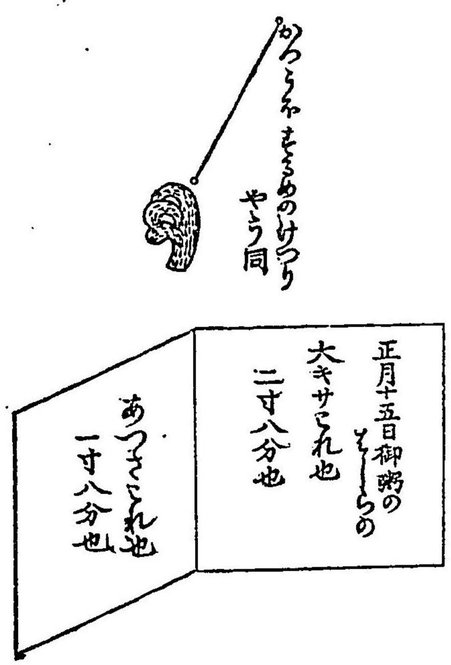
當代記云慶長十七年正月十八日近年絶テ久キ左義長今日卯尅於ニ内裡一被レ行

○赤粥

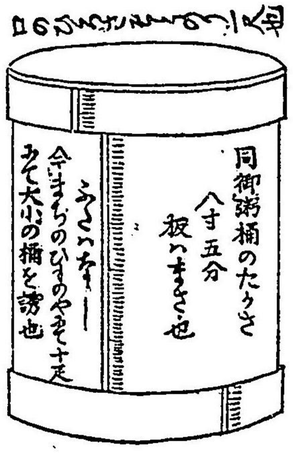
源順集云正月十五日子日にあたるあしたかゆのうへに小松をおきてつけて侍る

時しまれけふにしあへるもちかゆは松の千年に君もによとか

鎌倉年中行事云正月十五日御椀飯ノ時粥參賴入ル朝モ被ニ聞召一然レトモ前々ヨリ大草進上ハ七日ノ御ミソウツモ十五日ノ御粥モ御椀飯ノ時也



御散飯供御觸進次第云正月十五日一御粥わけ桶に入て參すんほうに有レ之一御粥のはしら數十參大キサのすんぼう奥に有レ之此はしら桶の底に入て上ノ御粥入ル九分め程入ル也はしらはにゝず其まゝ入ル也



尺素往來云將亦若菜醬水者玉燕人日之俗儀七穀烹粥者上元之世禮云々

世諺問答云問て云十五日にかゆを食するは何のいはれの侍るにか答人の國のむかし黄帝蚩尤を正月十五日にたいらけ魂は天狗となり身は地靈となり人民をなやましけれは時に黄帝天にいのりしかは天つけてのたまはく魂魄を崇幣し身をはめつせよとありしに仍て月毎にそのこんはくに幣をたてまつり給ひしそれによりて今の代に至るまて正月十五日の亥の時あつきのかゆにて庭中に天狗をまつりて東に向ひ再拜してひさまつきて是を食すれは年中の疫氣をのそ〳〵とうけたまはりしわたましうふやの時かゆを四方にそゝくもこのくのふとそおほえ侍る

散木集云むつきの十五にあかき粥のみゆるを見て人々歌よまむといふを聞てなとかよまさらん兼盛か集にも有心ちこそすれなといひてよめる

初春のもち月にもるかゆなれはなへてならすはあかきなりけり

二水記云永正十六年正月十五日早旦於ニ御末一赤粥御祝如レ恒

蜷川家記云永祿五年正月十五日粥小豆貴殿へ參歟否之段淵田平左衞門に相尋候處不レ存ニ知之一巽阿尋返事可レ申之由申終ニ何共不レ申候間小豆まい不レ參候引付他所ノ間追而可レ尋

多聞院日記云元龜三年閏正月十五日散鬼打如ニ初月一在レ之粥之祝義如レ形沙汰了

○御杖

簾中舊記云正月御つえの事御つえと申事は十五日のあしたとくさきつてうおもてにて御覽し候てのちいつもの御

所にて上様はしめ參らせ候御女房衆の右の御かたのうへをみつゝそと御うち候その御杖に御あたり候か御めんほくにて候ちとはくををかれ候て春の野のいねなとろくしやうゐにかゝれ候とて

枕草子云十五日はもちかゆのせくまいるかゆの木ひきかくして家のこたち女房なとのうかかふをうたれしとよういしてつねにうしろを心つかひ去たるけしきもおかしきにいかにしてけるにかあらん打あてたるはいみしうけうありて打わらひたるもいとはへ〳〵しねたしと思ひたるもことはりなり

狹衣物語云十五日にはわかき人々こゝかしこにむれゐつつおかしけ成かゆつえ引かくしつゝかた見にうかゝひ又うたれしとよういしたるすまひおもはゝとも〻をの〳〵おかしゆ見ゆるを大將殿は見給ひてまろそあつまりてうてさらはそこれも子はもうけむ誠に去るしある事ならはいとふともねんしてあらんなとのたまへはみな打わらひたるに云々

○具足餅

甲陽軍鑑云慕祝の餅同具足餅なんとは手にてひつきりて不レ食其儘可レ食齒の跡のなきやうに一文字にすきと食也

諸聞書條々云正月廿日に必具足の餅とて祝也小豆に入て認事大なる過り也小豆はにれは腹きる〻也依レ之忌蕪を添て調て可レ祝也蕪をは矢去り草と云此こゝろを持て用レ之なり

羅山詩集云正月念日國俗喫二赤豆餅一號曰二具足餅一武人殊祝レ之具足云者鎧之俗稱也此事不レ載二本朝月令及年中行事等書一不知二其所レ起戲作二一絶一

菽餅嘉儀在二我朝一武夫戸々悉烹調秖緣不レ着二男兒甲一

春夢一聲婆餅焦

又云正月二十日異邦之例紅絲繫レ餅置二之屋頭一謂二之補天穿一何春風不レ鳴二蝸皇五十絃一乎守勝口二占二十八言一以陪二鯉對一吾老而昏矣忸怩乎不レ能レ誨二周南召南一也自驚々レ彼耳本邦是日也喫二赤豆餅一號曰二具足餅一具足者甲冑之俗稱也或人曰見二其在レ列則廉頗善飯而溲趙括年少而驕或噬二乾橋一而齦見レ血或呑二不熟一而喉欲レ鯁且喫二其餅一如二藍田將之啗レ金耶爨二其利一乎拾二其瀋一似二令尹子玉之酬酒一耶餂二其味一乎勇怯不レ可レ知也而衣服佩刀皆是武人也詩云赳々武夫其然豈其然乎漸々之石豈可レ議也唯願一株天柱愈堅愈久不レ知二彼石破逗二春雨一也次韻以示レ之

赤菽雜烹餈與レ鮮萬夫血氣武門邊草廬不レ被二黃鸝顧一婆餅焦聲耳始穿

○初鮒

年中恒例記云正月十一日一白鳥一ッ初鮒二十京極進二上之一一初鮒六角進二上之一

又云二月廿四日一初鮒二十佐々木越中大藏大輔進二上之一月日不レ定

長祿二年以來申次記云正月十日初鮒十二白鳥一進上候京極大膳大夫レ毎年今如此勤來也

殿中申次記云二月朔日永正十三二十七式日不レ定一生成小鮒ノ事也三十例年進二上之一佐々木四郎三郎

○年始御奉幣

○御神拜

○御社參

吾妻鏡云養和元年正月一日戊申卯剋前武衛頼朝參二鶴岳若宮一給不レ及二日次沙汰一朔旦被レ定二當宮奉幣之日一云々三浦介義澄畠山次郎重忠大庭平太景義等率二郎從一去半更以後警二固辻々一御出御騎馬也著二御于禮殿一專光房良遥豫候二此所一先神馬一疋引二立寶前一宇佐美三郎祐茂仁田四郎忠常等引レ之次法華經供養御聽聞事終退御

又云安貞二年正月八日今日可レ有二鶴岳年始御奉幣一之由兼雖レ被レ定レ之延引云々

又云康元々年正月七日己亥來十一日爲二年始御神拜一依レ可レ有レ御二參鶴岡八幡宮一被レ催二供奉人一各着二布衣一可二參勤一由云々

鎌倉年中行事云正月廿三日鶴岡御社參日限雖レ不二相定一依レ爲二廿日頃一廿餘日二如レ此云々

長祿二年以來申次記云正月十九日八幡御奉幣早朝參賀也毎年今日此分也御對面在レ之日吉樹下御對面以前に御幣御頂戴之事早朝に八幡善法寺雜掌持參申候を庭上にて御幣役請二取之一幣串の尺三尺斗可レ有レ之歟然に雜掌をは平中門の外にまたせ候也幣の役は大略伊勢守同名也其所へ御所樣御成被レ成候て御座候時御幣役畏て進上也然者則御請取有レ之御置なから南へむかはれ御上納也扨御幣を被二渡下一間うけとりて平中門を罷出伺公仕候つる雜掌に渡候然者雜掌は退出仕也又御所樣頓て御對面所に御着

文明十一年記云正月十七日八幡御幣事明後日十九日可レ參也御行水にて可レ爲二御朝精進一之由善性寺被レ申二入之一御幣事雖二毎年の儀に候一一亂中は無二其儀一候當年より如二先規一可レ參云云

御事始記云正月十九日八幡より御幣まいり候を公方様御頂戴御へいの役人は伊勢駿河守勤レ之先々はうら打ちを着候

○八幡御代官參

長祿二年以來申次記云正月十九日必今日八幡へ御代官參在レ之其仁下向候て被レ參候時御前にて歸參御盃御太刀拜二領之一細川四郎

御事始記云正月十九日八幡宮へ爲二御代官一御供衆申次之間に一人參詣候

殿中申次記云正月十八日永正十三八幡御代官參細川四郎仍御撫物御劔今日被レ下レ之十九日八幡へ御代官參は無レ之かけ所にて今朝の御三盃を頂戴也

大館常興記云天文九年正月十三日荒川禮部より書狀在レ之來十九日八幡への御代官參の事藤宰相殿可レ然存旨勢州被レ申レ之(中略)藤宰相殿へ御代官參事被二仰出一候處近日鳥を用候八幡は十一日のは、かりの由候間いか、可レ仕哉被レ申候間三淵掃部頭方へ被二仰出一候由承及候也十五日宮内卿殿御局より文在レ之來十九日御代官參三淵掃部頭可レ被二勤申一にて候就レ其もうせんくらおほいの事不苦歟候レ被レ尋二下之一其外御部屋衆なとはいか、候へき事候哉由同被二仰下一候由承レ之畏而承レ之三淵其分不レ苦存候惣別諸大名たる各別其外は御もんせられ候かたかたは其分にて候御部屋衆も御もんの人々を被二召加一事にて候間もと〳〵ももうせん其分にて御入候つる此趣宜預二御申一由御返事申レ之也

伊勢貞信以來傳書云一正月十九日八幡宮へ爲二御代官一御供衆申次の間に一人參詣候八幡より御へいまはり候を公方様御ちやうたい候御へい役人は伊勢駿河守勤レ之先々は裏打を着候今は小素袍のにも候

蜷川家記云永祿五年正月十九日八幡御代官參大和宮内少輔

○御所心經會

吾妻鏡云文治三年正月八日庚戌營中心經會也導師行慈法橋云々

又云文治四年正月八日甲午心經會也導師若宮供僧義慶房請僧五口二品出御事訖賜二御布施一導師分被物二重馬一疋請僧口別裹物一主計允行政奉二行之一

又云建久五年正月七日己巳御所心經會也導師法眼行慈請僧大法師禪衍源信禪寮也先於二上臺所一差饌次開題此間將軍家出御有二聽聞一事訖被レ施二御布施一導師分被物二重裹物一請僧口別長絹二疋皇后宮權大進爲宗安房判官代高重等取レ之

又云建久六年正月十三日己亥將軍家御二參鶴岳八幡宮一(中略)還御之後於二營中一被レ行二心經會一鶴岳供僧等參二勤之一被レ引二御馬一云々

○寢殿大般若經

長祿二年以來申次記云正月十六日大般若經未刻於二御寢殿一在レ之相國寺僧遂被二參讀一者也毎年正五九毎十六日如レ斯也

○御祈始

殿中申次記云正月十一日就二御祈始一御太刀持被レ下二千秋刑部少輔一就二同儀一御太刀持在重有春被レ下レ之

年中恒例記云正月十一日御祈始在レ之在富方ニハ御太刀御馬被レ下レ之云々有春ニ八千疋御太刀被レ下レ之云々在富有春說也奉行千秋ニ御太刀被レ下レ之御祈始之故也兩所在富有春共以二御人形ヲ一上レ之也御人形ノ衣トテ或ハ織色ノキレ或梅染ノ面被レ下レ之近年ハ於二殿中一コレヲキセ被レ申云々在富說也御人形キヌヲ被レ着事中蔭衆調レ之樣體者何ニテモ御服ノキレヲ五分四方斗ニキリテ中ニ少カ目ヲツケテ御人形一ツツヽキセラルヽ也サテ御マクラモトニ一夜置レテ明日トク被レ出レ之也御人形進上之時ハイツモ此分也

○四季御祈

年中恒例記云正月當月四季ノ御祈トテ泰山府君之御祭在レ之寛正ノ度マテハ祭料御太刀一腰御馬一疋三千疋被レ下レ之長享之度ハ千疋被レ下レ之云々有春說也同在富方ニハ同祭料三千疋御太刀一腰御馬一疋鞍置也云々在富說也是ハ天曹地府ノ祈也五月九月十二月同レ之

武家名目抄稿第百八十五册

塙検校保己一編

歳時部二之一

○殿中遣敎經

年中定例記云二月十五日於二殿中一遣敎經あり千本釋迦堂の衆殿中に御堂をかまへらる奉行檜葉と申仁申沙汰候御堂を公方の御せうしこしらへ申候御本尊の左右に大なる柳の枝を立られその枝に法物をかけ候棘貝扇帶以下其外かゝり候はぬ物をは下に置候いにしへより公家門跡大名惣番衆以下分限によりて被レ出候也いにしへは過分の事にて候公方樣女中以下簾中にて御聽聞候御供衆申次祗候入候はぬ事なれとも注候なり二月六日より千本にて遣敎經十日御入候て結願十五日に公方樣にて御入候

年中恒例記云二月十五日於二殿中一遣敎經在レ之御燒香御沙汰也遣敎經ノ事代々檜葉爲二奉行一二月十五日於二殿中一在レ之佛堦コシラヘ申事御承仕ツカマツル也其後善命坊以下伺候候テ遣敎經在レ之御經始サル己前ニ御燒香御沙汰也遣敎經捧物沙汰御人數事宮門跡並諸門跡脇門跡出世坊官公家少々宮々御所々々女中衆並伊勢守伊勢守ノ妻ノコト御母諸大名御供衆伊勢同名少々評定衆奉行少々使節山徒諸守代以下京千本釋迦堂アリ進二上之一是ハ善命說也諸家捧物ヲハ千本衆並檜葉御承仕コレヲウケテ被レ給レ之云々同說也

○太刀拭

年中恒例記云二月彼岸三ケ度入日中日アケ日本阿來候テ西ノ御座敷ニテ御重代並御太刀等拭ヒ申也同朋申二次之一中日ニハ重代二ツ銘一ハカリノコヒ申也二ツ銘ノコヒ申候時ハ御紋仕候御供衆又ハ御部屋衆壹人同朋ニ被二取副一候自餘之御金代ノコイ申候時同朋ハカリニテノコワセラレ候也如レ此三ケ度參勤仕候テ結願ノ日御太刀白被レ下レ之同朋取次之一

○鏡磨

年中恒例記云二月彼岸中日ニ御鏡磨參候テ下御末邊ニテ御鏡トキ申也並女中衆御鏡モトキ申也仍御太刀白被レ下レ之同朋衆申二沙汰之一

○濱御犬

鎌倉年中行事云三月三日公方樣由井ノ濱ヘ御出御馬並召替御馬被レ牽レ之御調度ハ依二御矢取一御覺悟持御單物御紋櫻依レ爲二御馬一役人被レ帶二御劒一御沓役モ弓蟇目ヲハ力者ニモクセヘシ役人ハ鞦韆ヲモ厩者ニ持セヘシ其外ノ供奉ハ蟇目一弓ニ取添一ヲハ腰ニサシ二ヲハ力者ニ持スヘシ其外蟇目廿ニテモ又イクツモ爲二用意一若黨ニヒシキナトモタセテ御犬之不レ始間ハ磯ニ可レ置鹽滿時分マテ御酒數獻大草調進上其後御犬被レ遊及二數十匹一間遲御ハ每度夕天ニ及ナリ濱ノ御犬ハ毛胡退治ノ御祈禱タル間每年御出尤也

○桃花飯

○桃花盃

季瓊日錄云長享三年己酉三月三日自二泉里一桃花飯一盆並竹葉酒一瓶自二管里一賜二桃花飯一盆一遣二昌子於萬松一伸二昨日來使之謝一且築地賀之事可レ進之由白レ之堂首座右京兆今日花御所大松被レ引二東府一凡人數四五十人云々龜千代持二桃花一盆一來栖老雲澤衆爲二節之禮一來勸二桃花飯桃花盃一

○鷄合

吾妻鏡云承元元年三月三日戊寅於二北御壺一有二鬪鷄會一時房朝臣親廣朝光義盛遠元景盛常秀常盛義村宗政等爲二其衆一云々

又云寶治元年三月三日丙辰營中有二鬪鷄會一也此間若狹前司等聊喧嘩殿中申次記云三月三日一鬪鷄被レ御二覽之一殿中日記ニ如レ此點レ之一鳥合被レ覽レ之如レ此點レ之

年中定例記云三月三日御對面以後鷄合あり三番五ケ番より一はつゝまはらせらるゝ今一は御牛飼持參やかて彼者あはせ申候御かゝりにて簾中より被レ覽其時は御供衆申次衆平中門より參候て庭上に伺公候也番頭も同庭上に伺候て鳥合過候へは則各退出候なり

年中恒例記云三月三日一鷄合有レ之鷄五ケ番より一羽つつ進上合申事御牛飼ノ役也三番也御供衆番頭庭上に祗候雨雪ナトフル日ハ御エンニ祗候被レ申也御牛飼モ鳥持參仕候也仍三番在レ之御牛飼に御太刀被レ下レ之同朋衆役レ之

薩戒記云應永卅二年三月三日禁裏仙洞鬪鷄如二先々一

長祿二年以來申次記云御鳥合の事御對の事每年五ケ番番頭よりまいる其外には御牛飼持參申候間仍三つかひ也頓て御牛飼是をあはする也

伊勢貞助雜記云三月三日鳥合の事は何方より勤被レ申候哉鷄ハ五ケ番より被レ參候御對面以後被レ御二覽之一候彌童八歳子鳥を合申御太刀を被レ下レ之候別に樣體ハ無レ之候殿中

日記には鬪鷄とも鳥合とも認レ之

親長卿記云文明七年三月三日御牛飼等鷄六羽持參有二鬪鷄三番一此事一昨日御牛飼以二民部卿一伺申折節予候二御前一可レ被二如何一哉之由有二御尋一亂後未無二鬪鷄一於二宮御方御前一内々可レ有歟之由也尤之由有レ仰有二勅答一仍於二宮御方御前一有レ之云々

○雛祭

紫式部日記云わか宮の御まかなひは大納言のきみひんかしによりてまいりすへたりちいさき御たい御さらとも御箸のたいすはまなともひいなあそひのくとみゆ

中務集云中宮のひいなあはせにかはらのかたすはまにつくりひいなのかた七月七日

たなはたもけふはあふせときく物をかはとはかりやみてかへりなん

月刈藻集云三月三日雛遊シタル處ニテ飛鳥井榮雅卿都ニハヤヨヒノ空ノノトケクテヒナノアソヒモ思ヒヤル哉」女子三月三日小偶夫婦形作是號二雛壹對一其外大小人形名並二置座上一供二酒食一爲二人間一玩レ之名謂二雛遊一是往古有二女童業一凡女子幼童時身添二人形一號二尼兒一速爲レ負二惡氣一也今拂子一既作是尼兒類歟又祓之時撫物是以同意也然

雛遊幼童三月三日遊事此謂歟

年中恒例記云當月三三日斗ノコトナリ日コトニ在富有春御人形進二上之一進上之御太刀被レ下レ之

建内記云永享十二年三月三日乙巳天晴佳節幸甚祝着如レ例上巳祓在貞朝臣自二昨日一送二人形一參内宿侍之間成房令レ置二枕頭一今朝遣二彼撫物一之處御祈勤行依返進候但予撫物一同可レ送レ之可二祈念一云々依又送レ之即到來

○草餅

文德實錄云嘉祥三年五月辛巳嵯峨太皇大后崩先レ是民間訛言云今茲三月不レ可レ造レ餻以レ無二母子一也識者聞而惡レ之至二于三月一宮車晏駕是月亦有二太后山陵之事一其無二母子一遂如二訛言一此間田野有レ草俗名二母子草一二月始生二莖葉一白脆每屬二三月三日一婦女採レ之蒸擣爲レ餻傳爲二歲事一今年此草非レ不二繁生一民之訛言天假二其口一

後拾遺集云三條太政大臣のもとに侍ける人のむすめを忍ひてかたらひ侍りけり女のおやはらたちてむすめをいとあさましくつみしけるなといひ侍けるに三月三日かのきたのかた三夜のもちくへとていたしけるによめる藤原實方朝臣

みかの夜のもちいはくはしわつらはしきけはよとのに

母こつむなり

年中定例記云三月三日内々の御祝の次に遂の餅まいる

三中口傳云草餅三月三日殊用レ之其外不レ然

○浴佛

吾妻鏡云建久二年四月八日乙酉南御堂佛生會也爲二御禮佛一幕下並御臺所若公等御參

殿中申次記云從二永正十三丙子年一至二同十七庚辰歲一記錄事四月八日浴佛如二例年一等持寺

年中恒例記云四月八日自二等持寺一釋迦像參リ御湯ヲツトメサセラル、也蔭涼軒持二參之一同桶ニ花ヲ入申テ御末ノ同朋調二進之一

○蚊帳ツリ始

年中恒例記云四月中吉書ニ御カチヤウツリ始ラル、也伊勢同名兩人參候テツリ始候同ヲロシ申時モ兩人參テヲロシ候也每日ノアケヲロシハ女中上臈又ハ同朋ノ御役ニテ候七打候ヘハ必御蚊チヤウヲオロシ申サレ候也ツリ始申候時三御盃參候テカケニテ伊勢同苗頂二載之一也

在盛卿記云長祿二年四月四日烏丸殿ヘ注進姫君樣御かちやうつりはしめの日今日四日かのとのとり時午五日みつのえいぬ時むまとり

伊勢貞助雜記云殿中御蚊帳つり申事は四月蚊いてき申時分陰陽頭に申御蚊帳つり申日次勘文進其日伊勢名字兩人下總守貞行肥前守盛種參勤ちかき頃は貞遠參勤申也每日のあけおろしは女中上臈の御役なり又八月中に撤却の日次を陰陽頭に彼勘文注進の日兩人陳二祇候一おろし申也いまた蚊御座候へは棹をはとり申てひつつりと申て何にてもかりそめにつられ候て九月まてひつつりにて御座候

○初瓜

殿中申次記云六月二日初瓜一籠樣樣へ參佐々木中務少輔入道

年中恒例記云五月四日初瓜進上右京太夫殿同右馬頭伊勢守日不レ定初度ハ禁裏樣エ參候也次鹿苑院エ參

蜷川親元記云文明十三年五月十五日己巳八幡田中坊生濟より御方御所樣へ初瓜あらた一籠進上公方へは以二別人一被二申入一云々廿八日壬寅六角殿より初瓜一籠進上御方御所へ御二披露之一

蜷川親俊記云永正十三年六月十八日公方樣江初瓜一籠細美五端圓座弐拾枚御進上候間致二披露一甚以珍重候恐々謹言六月十一日伊勢守貞陰謹上佐々木中務少輔入道殿

○粽

和名類聚抄云糉風土記云レ糉作粲反字亦作粽和名知萬木以二菰葉一裹レ米以二

灰汁煮之令爛熟也五月五日啖之

殿中申次記云五月四日粽百恒例眞木島次郎五日粽百恒例伊勢守

年中恒例記云五月五日伊勢守赤松有馬眞木島粽ヲ進上之

澤巽阿彌覺書云五月五日粽百美濃田桐河田取合御進上御末女白川殿へ渡申候巽阿云々

季瓊日錄云永享十年戊午五月四日林光院被參卽可始講之旨有命方丈勝定院等持寺當院並某各賜粽子百把

北上記云粽の事むきてはたか粽にては參らせぬ事也女房兒なとにはむきて刀目付て可參扱草の上に置て可參候一むきてゑたゝめたらは殘は其まゝ可置扱男には頭より三節はかりむきて置へしそれも殘二ツはかりむきて可置又眞中に刀め一付て參する事も在之人によるへし草のすへは頭なり逆にむくへからす

蜷川親元記云寛正六年五月出仕如常御祝物粽以下三郎方御所樣上樣今出河樣分令調進

伊勢貞助雜記云五月五日に粽進上に成申候哉先規は方々より進上候つる近年者粽百眞木嶋次郎同百伊勢守進上之此外も可有之候五月五日の外には御樽御さかなとには不成進上候八朔に宇治大路竹のかわにてつみたる粽のひの籠進上仕候也

伊勢貞宗記云ちまきの事一かわをむき小串にさし候て人の給り候を用候よのきなく候也

武雜記云五月五日のちまき是は頭をゆひたる所をまねたへ候てちうふく仕事也其故かやの本より喰候事尤の儀にて候ほとき候事惡敷候引切てたへ候事此心得にて候

三議一統大雙紙云粽の庖丁の事ちまきをかしらよりむきかけてすちかへて二刀きれは三ツになるへし芝居なとにてはかやうにして扇にするて參へし

諸聞書條々云粽の事むきてはたか粽にては參せぬ事也女房兒なとにはむきて刀目付て可被參さて草の上に置て可被參候一ツむきてゑたためたらは殘は其まゝ可參さて男には頭より三ふし付むきて置へし其も殘をはむくへからす但賞翫の人ならは粽二斗むきて可置又眞中に刀目一付て參する事も在之人によるへし草のすへは頭なり逆にむくへからす人中にて物を食事食と箸と一度に不可取之箸の後に食を可取上大汁をは左の手にて取上可食小汁をは右の手にて取て左手へ取てさて食て又右の手へ取てさて置也三の膳も右にて取て左へ渡て食て又右へ取て膳に置物なり左の手にて取て左にてそのまま食事以の外賤き事也

○菖蒲蓬

續日本紀云天平十九年五月庚辰天皇南御苑觀騎射走馬是日太上天皇詔曰昔者五日之節常用菖蒲爲縵比來已停此事從今而後非菖蒲縵者勿入宮中

類聚國史云弘仁十四年五月戊午御紫宸殿宴侍臣中務省率所司獻菖蒲如常

三代實錄云元慶七年五月五日庚午天皇御武德殿覽四府騎射及五位以上貢馬喚渤海客徒觀之別勅賜大使已下錄事已上續命縷品官已下菖蒲蕘

河海抄引御記云延長三年五月五日丙申書司立菖蒲瓶絲所奉續命縷如常

吾妻鏡云建久元年五月五日戊午今日營中不被葺菖蒲是御輕服之間御悲歎之餘也云々五年五月五日乙丑御所中屋舍葺菖蒲事可爲檜皮皮葺所役之由被仰分年々政所下部等沙汰之云々

又云建暦元年五月四日乙卯爲民部丞康俊伊賀次郎光宗等奉行新御所可被葺菖蒲否被尋陰陽道等之處雖新所爲御移徙後者尤可被葺以前有其憚云々年中定例記云五月三日曉御殿の軒に菖蒲に蓬をそへてふき申也檜皮師の役なり

○紙幟

羅山詩集云大喪慶安四廢端午禮否人皆疑之忽聞營內掛菖蒲於是家々挿蒲造粽且爲童兒立紙幡木冑者亦稍有之長命縷懸五綵絲却牽愁緒萬人悲楚風須掃除秦法憐殺野蒲爲肺時

○菖蒲兜

狭内侍日記云五月五日女房たちに玄やうふかふとせさせ花ともかさしあやめの日かつらかけはけしきほとに云々」

增鏡云五月五日所々より御かふとの花藥玉なといろ〳〵にぉほくまい〻り朝餉にて人〻これかれひきまさくりなとするに三條大納言公親のたてまつれるねに露をき絲のさまもなよひかにいとえんのりてみゆるをうへも御目ととめてなにとまていへかしとのたまふ人々もおよすけてみたてまつる

蜷川親俊記云天文七年五月四日丙子從細川與州爲嘉例根菖蒲貴殿へ被進之其御狀に來年は若子御誕生あり甲莊にさせらるへき由にて歌アリ

ひく心あさかの沼におらぬとは君そあやめのねさしに
もみん」御當座色々返歌可ㇾ仕候由に候間親俊
君かひく心のそこゐあさからぬあさかの沼のあやめと
もみん
舜舊記云寛永九年五月二日節句祝儀甲長刀二色滿德舍弟
進ㇾ之畢

○菖蒲刀

藤森社縁起云光仁天皇第二皇子早良親王年來御崇敬異
于他一也爰天慶元年四月一日超二御兄山部親王一立二太子一
今年異國蒙古責來之由有二風聞一以二立太子一爲二大將軍一可
ㇾ有二退治一之由有二宣旨一依ㇾ之立太子大軍勝利事被ㇾ祈二申
當社一同年五月五日御出陣之處大風吹而大海翻二波浪一件
蒙古不ㇾ及二一戰一悉以令二滅却一畢以二此因緣一毎年五月五
日祭禮神幸之時在地之神人等鎧二甲冑一帶二弓箭一列二騎馬一
事第一異國降伏之表示第二天下泰平之瑞相第三疫病消除
之祈禱也爾餘以降洛中洛外至二邊土遠國一小男童兒帶二作
太刀刀等一以二菖蒲一飾ㇾ之稱二菖蒲刀一是則當社祭禮供奉行
粧
蜷川親俊記云天文七年五月五日若君樣御菖蒲刀御太刀貴
殿進上中島仕ㇾ之

○菖蒲切

甲陽軍鑑云德川家康公十二歳竹千世殿と申奉時中間にめ
し五日菖蒲きり見物にいてさせ給ふ一方に人三百はかり
一方に百五十ほとなり見物の人々是を見て人のすくなき
かた必まけんとて大勢の方へ立よらさる者はなかりけり
さるほとに竹千代殿を肩にのせ奉りたる中間も大勢の方
へ立よらんとす其時竹千代殿仰らるゝは何とてならは人
のすくなき方勝へしあれほとすくなき者共か多勢を輕思
ひ出張てゐたるは能々多勢の方を弱思ふた者也又は兩方
討合時多勢にてすくなき方をすけんと思ふ事もあらんい
さすくなきかたへゆきて見物せんとのたまふ御供の者と
も腹立してゑらぬ事をはのたまふなとて無理に大勢の方
に留けり如ㇾ案打合時人のすくなき方の後より大勢かけ
付て荒手を入替うちけれは初大勢ありし方打まけてちり
ちりにけ亂る見物の者も我先にと退ふためく竹千代殿
見玉ひて云ぬ事かと宣ひて肩にのせ奉りたる中間のかし
らを御手にてたゝきわらはせ玉ふ

○菖蒲枕

吾妻鏡云嘉禎四年五月四日及ㇾ晩自二將軍家一被二調進一菖
蒲御枕（鑄二金銀一）並御扇等於二公家一云々件御枕者爲二六位定役一
調進者也而依ㇾ被ㇾ求御進物之次如ㇾ此云々
二樂軒富士歴覽記云明應八年五月五日關民部大輔盛貞在
所について先近所の寺にとゝまりけるに今宵は菖蒲の枕
しく夜なりとてしき侍て
宮古にもおもひやいつるかりねしてあやめのまくら獨
しくよを

○菖蒲莚

年中定例記云五月四日の夜菖蒲の御莚御枕參りて玄かせ
られて御玄つまり候

○菖蒲湯

年中定例記云五月五日菖蒲の御湯の御行水あり勢州へ御
成御風呂但菖蒲御湯參る
○年中恒例記云五月五日御祝御湯參御湯ニ先夜シカレ候
蓬菖蒲入也

○藥玉

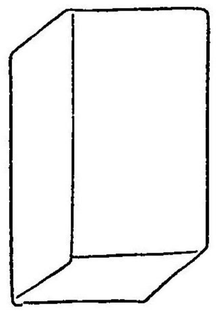
殿中申次記云五月五日藥玉禁裡樣ヨリ參藥玉伏見殿ヨリ
參（但四月にも參也）
能中舊記云五月御くすたまの事五月五日の御くす玉は御
所さまへは十二すちつゝのか參り候上らうたちより御下
まては九すちにて候御ひてうは六すちつゝにて候內裏伏
見殿こりやう殿より大なる御くす玉參り候わきあけの上
藺たちへ參らせ候てそと御かけ候てわきあけの程御かけ
より云々
雲州消息云今朝自二或所一給二藥玉一旒一作以二百草之花一貫
以二五色之縷一模二草虫形一栖二其花房一芳艶之美有ㇾ興有ㇾ感
古人云此日懸二續命縷一則益二人命一云々
世諺問答云五月五日藥玉とてかくるは何のゆへそや答け
ふをは藥日といひて一切の藥をは此日とるなり其故は諸
病かならす五月におこる也溫氣を得てもろ〳〵のむしへ
ひ鳥けたものともか力を得ていきをはきいたして人の氣
力をなやまする日なりされはけふ藥草を五色のいとにてと
とのへてひちにかくれは（中略）群臣に藥玉を給事の侍な
り

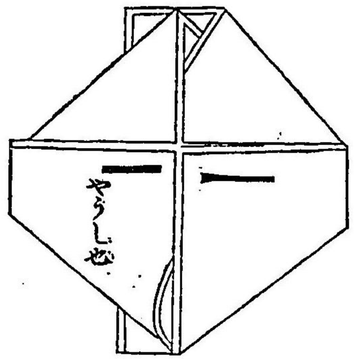
○氷堅餅

年中恒例記云六月朔日今日氷堅餅參大草調二進之一
御散飯供御調進次第云六月朔日氷もちい、參ル一あかき
もちい十二大キサ奥にゑるし置也一ゑろきもち十二同日
一ほしい、へいかうに十二はい參るほし飯はひかすして
其ま、參五月の廿二三日頃より用意するなりあつきすい
はう二かさねにつゝみ上下をやうしにてとつる也

六月朔日參ル氷もちいのすんほう

六月朔日に參る氷もち　ひの　すんほう





○嘉定　嘉通

御湯殿上の日記云明應四年六月十六日はる、いつものこ（金鈍）とくけふの御かつうなかはしよりあしたの物にきんとんまいる

忠富王記云文龜三年六月十六日例嘉通喰在レ之（益秋）加二人數一有二其興一

蜷川親俊記云天文十一年六月十六日乙未嘉定如二恒例一認レ之

世諺問答云問云嘉定と申事は何のゆへそや答この事はさらに本說ありかたき事にやた、かの錢の銘にかちやう通寶と侍れは勝と云みやうせんを去やうくわんするよしをそ承およひ侍りし

崇恩院内府（惟房公）記云永祿元年六月十六日今日號二嘉定一有二祝儀之作法一家門嘉例如レ常局々各江所レ參如レ例午刻自二目々典侍局一招引嘉定有二祝儀一各一盞及二數盃一沈醉之外無レ他

駿府記云慶長七年乙卯六月十六日嘉定諸大名參候云々

又云慶長十七年壬子六月十六日嘉定如レ例日野唯心水無瀨一齋飛鳥井中納言冷泉三位土御門左馬權助舟橋式部少輔出御仕左府諸武士伺候午刻出二御南殿（御座上壇）宰相殿中將殿少將殿同相隨給日野水無瀨飛鳥井冷泉土御門舟橋等（共座二疊上）依二上意一山名禪高召二疊上一其餘皆候二御縁一御前之御膳（三方）日野飛鳥井（三方）冷泉土御門舟橋水無瀨山名（足附）其後珍菓嘉肴片如レ山積レ之所レ候之盃頂二戴之一

舜舊記云元和九年六月十六日二條御城例年嘉祥之義式アリ御馬廻衆悉被レ下候由也

○六月祓

○名越祓

山槐記云治承二年六月二十九日壬辰無二節折一諸家又無二六月祓一閏月可レ行也古家或今夜祓云々先例不レ同云々閏有六月年々例大同元年貞觀元年延喜元年同廿年長和四年長元七年永保三年久安四年大同元年以後迄久安四年迄閏在六月歳大略如レ此歟延喜元長和四長元七永保三久安四等之年皆以二閏月一被レ行レ之云々然則八ヶ度之中於二五ヶ度一者以二閏月一被レ行レ之歟

吾妻鏡云貞應三年六月二十九日今日無二六月祓一依二觸穢一也天下諒闇之時不レ被レ行之由及二御沙汰一云々

又云文暦二年六月三十日辛卯來月依レ爲二閏月一今夜可レ被レ行二六月祓一哉否事爲二藤内判官定員奉行一被レ尋二問有職并陰陽道輩一云々

鎌倉年中行事云六月晦日夜御撫物被レ遣御使如レ例次名越ノ御祓同茅輪陰陽頭調進輪ヲハ御一家中被二越申一也潤月アル年ハ閏月ニ輪ヲハ可レ有二御越一其故ハ初月ヲ可レ有二御用一歟否事二階堂播州へ御尋アル處卽古歌ヲ引意見被レ申

織女ノ天ノ河原ヲ七カヘリ後ノ晦日ニ御祓ヲソスル

此歌入道等申云和歌云ノチノミソカニミソキノ時ハ閏月ノ御用可レ然歟之由依レ被レ仰申上六月ノ輪計ハ閏月ヲ本ニナサルヽ也

年中恒例記云六月晦日夜傳奏祇候候テ御輪ニ入被レ申候麻ノ葉ヲ左ノ御手ニモタレ候テ御ムシロノ上ニテ三度輪ニ入被レ申候也御輪ノ被在春朝臣御輪調二進之一役人齋藤將監御庭上ニ祇候候テ御八足并御輪取アツカイ申也於二内儀一御祝參也御劔役人祇候御左

建内記云永享十一年六月三十日（丙午）今夜六月祓私儀如レ例菅貫（伺菅曹云菅貫云曹以菅（少々裝交レ之）造レ之以紙卷其上也）居レ蓋送二陰陽師許一祭物三十疋相副河内入道當慶加二下知一云々在貞朝臣相副祓返渡レ之次越輪（輪トハ菅貫事也曹ハ持二左手一拔持右手一起テ後ニ打拂テ氣ヲ吹懸也）三度如レ此先日諸大夫家種奉二仕之一自二去年一重服仍成房口ニ越候有二詞文一如レ例次青侍（時和）（諸大夫有二指合一之故也）成房并女生巳下上下越候也重服ノ者ハ祓ヲ不レ持只越二菅貫一許也仍家種忠敎如レ此仰含了

永正十七年記云閏六月廿九日六月盡御祝如レ例抑彼名越ノハライノ事閏月之時可レ爲二最初月一歟又後月歟可レ尋二決之一一往任二其理一當月ニ沙二汰之一也門跡御祝同前也

明月記云大永七年六月二十九日荒和祓不レ堪者如二雁衣一之間以レ衣令二菅貫一今夜陰陽師(資光門生)云姓者不二菅貫一也俗説云六度菅二貫之一如何此大謬説也只如レ例祓雖レ向二贖物一不レ立之由稱レ之仍今夜用二之説一云々

武家名目抄稿第百八十六册

塙検校保己一編

歳事部二之二

○棚機祭

建禮門院右京大夫集云とし〳〵に七夕に歌よみてまいらせしをおもひいつるはかりせう〳〵これもかさつく

をしなへて草村ことにをく露のいもの葉にしもけふにあふらむ

年中定例記云一七月七日御對面已下同前梶の七葉に御詠あそはされ候也

年中恒例記云七月七日梶葉二七夕ノ歌ヲ七首アソハサルル也アカツフ朝七粒以レ水參也寅ノ時ノ水ニテ御硯ヲ御會所同朋アライ申テ御硯水ニハ芋ノ葉ノ露ヲソノマヽニ葉ニテ包テ御硯水入ノ上ニ置申也又御硯ノ蓋ヲアヲノケテ梶葉七枚梶皮サウメン等ヲ入テ梶葉ニ歌ヲアソハサレテ後梶皮サウメンニテ竹ニ付テ御ヤヂヘアケラルヽ也

季瓊日録云寛正六年乙酉七月七日今晨七夕諸大名外様近習公家今出川殿御出仕管領畠山殿獨賜二御盃一御相伴衆并近習一國守護衆賜二御盃一門外柳街人如レ市光輝奪レ目也

伊勢貞助雜記云七夕に梶の葉に御歌被レ遊候御事候哉七夕の御會は面向にて御座候梶の葉に御歌被レ遊候御事は内々の御事候哉梶葉七枚に御歌をあそはされやねへ後向れて打上られ候何も内々にての御事にて候

○七種御遊

年中定例記云七月七日御對面已下同前梶の七葉に御詠あそはされ候也勢州へ御成御風呂常德院殿御時は笠懸犬追物御歌御連歌御鞠揚弓御酒以下七種の御あそひ御座候時も御入候

○七夕ノ矢

北條五代記云(昔矢平條)扨又鐵を木鋒のことく打のへさきをのみのことく作り矢の根とす是をすやきと名付毎年七月には七夕の矢と號し大名小名知行役に主人へ上る

○索麺

古今著聞集云七月七日むきなはの房中にたるましきよし申けるをきゝてよめる法眼長真

いかなれは世にはおほかるむきなはの一房にたにたらぬなるらん

鎌倉年中行事云去七月七日御索麺參其外御祝如レ常

伊勢貞助雜記云索麺御肴に進上に成候哉御門跡方より自然は御進上候一乗自爲二御生見玉(七月五日也)御樽の御肴素麺一折蓮若根一折御樽貳荷御進上候つる又能登より輪島素麺箱に入て通作進(能登ノ名産)(修理ノ唐名)二上之一候其外は不レ及見候但精進方よりの御肴に參候哉不レ存候

○生見玉

明月記云(天福元年七月十四日記)二代之御盆存レ例送二嵯峨一(中略)俗習有二父母一者今日魚食云々於レ予不二忌憚一適好二念誦一者象日葷食極無二其詮一訪二世々父母一事不レ可レ依二今生二親一云云

年中恒例記云七月十一日御生見玉ノ一獻有レ之御所々御參日野殿公家少々御供衆祗候申サルヽ也

殿中申次記云七月九日千疋(御所紙)如二例年一御生見玉參三寶院殿(十一日に御進上も有レ之)

建内記云嘉吉元年七月十日五辻來面々張行聊表二祝着一之儀毎年之儀也世俗號二生見玉一至源起レ自二盂蘭盆經一也

蜷川親元記云寛正六年七月十一日丙辰新造御生見玉備州武庫御出十三日戊午御母御方へ御生御玉備州之女中御出文明五年七月十一日公方御生御玉御祝也十二日壬寅貴殿

生御玉御祝御内方羔一種一瓶進二上之一御一家少々如レ上
武田殿女中御出終夜一献あり東公方衆少々同前
又云文明十年七月十一日辛未御成御供一番八時御方御所へ御い
き御玉先上様則御所様御門役貴殿より被レ勸三献は御方
御所御一献也大草調二進之一十五年七月十一日壬寅御生御
玉御祝大草調 進分御祝奉行松田豐前守方より被レ相二觸
之一
蜷川親俊記云天文七年七月八日己卯若公様御生見玉御一
献アリ十二日癸未與力衆 生見玉嘉儀也貴殿へ御樽進二上
之一
親長卿記云文明八年七月十一日參内依レ召也 若宮御方已
下有二御祝之儀一云々 いきみた
年山紀聞云今按いきみたまといふ事文明の前頃より始ま
りたる歟七月の盆に亡者の霊魂の來るよしをいひて祭る
より移りて現存 の父母兄姉なとの御霊を祝ふ心なるへ
し
明應四年御湯殿上日記云七月六日御めてた御さか月二宮
の御かた三宮の御かたおかとの御ふた御所ほうあん寺殿
大ゑやう寺との御ふた御所あんせん寺とのよりも御まい
りなけれとも御さかな三色一かまいるのこりの御所々々
よりはなかはしへ御申とものありしふたゆふめしてうたは
せらるゝ御さかつきの御かすは八こんまいる十日めてた
御さか月まいる宮の御かたふしみとの御むろくわしゆ寺
の宮大しゐんの御かつしき御所も御まいりありおり五か
う御たる二かまいるふしみ殿より御かはらけのもの三色
一かまいるくろとにて九こんまいる三こんに宮の御かた
しやく五こんにふしみとの六こんに御かつしき御前はか
りり〳〵七こんにてんゑやくこと〳〵くにたふ御ともに
六らうよしらうなと參らるめしてうたはせらるゝ御ひし
ひしとめてたし〳〵十三日ゑもかはら殿よりめてた御さ
か月まいらせらるゝ御いはゐありてあなたへはかはらけ
のもの二色にて一かまいらせらるゝあんせんし殿へも御
かはらけのもの三色にて一かまいらせらるゝ
御隨身三上記云永正九年七月十日青御馬責申候其以後越前樽毛被
レ責候又其後久御雑談三郎八幡御參籠二付て參候時石清
水にて鯉を見候由申上候きとく可レ然事のよし上意にて
上の御元服の御時御茶の湯の御はんそうに井より鯉のあ
かりて入たる御事を被二仰聞一候八幡にてのきよき事に候
の間一献を可レ申の由上意の御され事にて候次三郎某に
いきみ玉の事なと御されて事在レ之

慈照院殿年中行事去七月十一日女中御所々爲二生見玉御
祝儀一御參賀有二御一献一云々
室町殿醍醐登山日記云永正十五年七月十三日雨下去十一
日門主爲二御生見玉一御二參室町殿一御猶子之故也時宜快然山中之
體内々被二尋仰一云々
家中竹馬記云ゑき三献の時親の盃を子息拜領の時は先親
の盃を一ついたゝきて扨我前の盃を二參りて置るゝを又
其後子息の盃を親もまいる時は常の時のことく三度參ら
するに三度をくはふる也是はいき見玉の祝の時か様にあ
り其外祝にはゑき三献の盃は我前々々を飲ておかるゝま
て也
舜舊記云天正十二年七月五日本所へ目出度事之爲二禮義一
樽水瓶索麺三把瓜十十一日本所嘉例之目出度祝義二樽代貳十疋
文祿五年七月十一日本所生見玉祝儀有予貳拾疋樽代云
云
江城年録云寛正六年己巳七月十三日公方様御氣色御本腹
爲二御祝一御本丸江相國様御成是は生御霊の御祀に御座候
間御能の上におとりを懸二御目一度由公方様御内意を西
丸老中迄被二仰遣一老中何も相談申候は大御所様終におと
り御上覽被レ爲候事不レ存候間申上候はゝ御機嫌如何可
レ有と存申かね藤堂和泉守に此儀令二相談一云々
○盂蘭盆
○霊祭
日本書紀云齊明天皇三年七月辛丑作二須彌山像於飛鳥寺
西一且設二盂蘭盆會一
續日本紀云天平五年秋七月庚午始令二大膳職備二盂蘭盆供
養一
扶桑略記云仁和五年七月十四日甲辰主上奉レ爲二先帝一備二
盂蘭盆八十具一或送二御願寺一或送二西塔院一或送二花山寺
等一
吾妻鏡云文治二年七月十五日庚寅迎二盂蘭盆於勝長壽院一
被レ行二萬燈會一仍二品並御臺所渡御是奉レ爲二二親以下尊
霊得脱一也云々
又云建久元年七月十五日丁卯今日盂蘭盆之間二品參二勝
長壽院一給被レ勸二修萬燈會一是爲レ照二平氏滅亡衆等黄泉一
云々
鎌倉年中行事云盆御 追善於二殿中一有レ之御代之次二不
レ撰二忠不忠ノ人體ヲ一供二以テ御弔在レ之御寺僧達兩日被
レ參仍御寺へ御燒香二 御出十五日ハ建長寺施餓鬼御聽聞
供奉如レ常同十六日濱之新居閻魔堂號二圓應寺一應永大亂

ノ時爲ニ亡魂御弔一施餓鬼ノ事扇谷ノ會下海藏寺ニ仰出也

季瓊日錄云永享七年乙卯六月二日條諸寺御成之處不レ致ニ斟酌一可ニ引導申一之由被ニ仰出一諸以像可レ施之事被ニ仰出一盂蘭盆御燒香之事被ニ仰出一當寺誓記之事伺レ之自ニ方丈一被レ出ニ兩人一一人則中融知客自ニ飯尾大和守方一號ニ上意一雖レ然以ニ御不審一被レ相ニ尋大和守一大和瓜二荷賜ニ等持寺一栖眞之事伺レ之又云長禄三年己卯七月十五日條今日以ニ盂蘭盆之故一明日可レ有ニ出院一之由被ニ仰出一也

○盆燈籠

明月記云寛喜二年七月十四日近年民家今夜立ニ長竿一其鋒付下如ニ燈樓一物上紙張齋燈遠近有レ之逐年其數多似ニ流星人魄一

殿中申次記云七月十四日御燈爐四王母一禁裡樣へ參例年之儀也右京大夫殿同和歌心一次郎殿同瓜例年一上乘院同栢榴一烏丸殿同和歌心一藤兵衛佐殿同人形あやつり一色兵部大輔殿同天王寺龜井ノ水一伊勢守

年中恒例記云七月十四日御灯籠進上之人數細川殿コレハ禁裏樣へ參也畠山殿伊勢守上乘院

蜷川親元記云寛正六年七月十三日松林院御燈呂進上大井河之體也蜷式申次貴殿御燈呂御進上唐團扇也蜷式進上也備州御被管片岡作也親元進上燈呂二武庫より貴殿へ被レ進レ之御燈呂平硯蓋ニ眼瓜興一殿御作也同新造女中へ一ッかたつふり武者月輪院より被レ進燈呂也

又云文明十年七月十四日己酉沼田與五郎燈呂到來キリコ

又云同十三年七月十三日丙戌御燈呂御進上上さまへ一女房二人貝おほひ河内殿作兵庫殿より公方樣へ一唐人上野と の〻御作貴殿より御方御所樣へ一鐘樓小谷作兵庫殿より

御湯殿上日記云明應四年七月十三日御とうろけふよりまいる(中略)十七日御とうろとも御くし(圖)にて御くはりあり

蜷川親俊記云天文八年七月十二日丁未御燈呂富士山雷鳴アヤツリ中島作レ之

澤巽阿彌覺書云七月十五日蓮供御折一御燈呂御進上公方へ布袋小谷作御方御所へ朝いな門やふる所上野介殿御作上樣へ宮女二人さくらかさしてけふも暮しつの所河内殿作

舜舊記云文祿五年七月十四日天晴靈祭也六條本願寺へ燈樓爲ニ見物一參

○蓮飯

敎言卿記云應永十二年七月十五日戊申盆無爲參事蓮葉飯

事子孫賞翫珍重々々

建内記云正長二年七月十五日仝日自ニ頭在大辨許一送ニ荷飯一毎年之例也今日祝着之儀荷飯如何中元之風俗也

年中恒例記云七月十四日新米ノ飯ハスノ葉ニ包テ參大草調ニ進之一十五日蓮ノ飯曇華院殿並伊勢守進ニ上之一

蜷川親俊記云天文八年七月十五日庚戌上池院より蓮飯鯖鮒鮓一荷到ニ來之一

御散飯供御調進次第云七月十四日一はすの葉十まい一新米のくこ大小のはロロ一はい宛入て二ッ參ルくこはちとこわくこしらゆる也

○刺鯖

澤巽阿彌覺書云七月十五日鯖一さし鮒一さし蓮の葉につつみて臺にすえ繪有レ之松竹鶴龜

雄長老狂歌百首云

蓮にのるたくひはいけうくんすなり花には佛はにはさしさは

○尾花ノ粥

年中恒例記云八月朔日尾花ノ御カユ參大草調ニ進之一

風呂記云八月一日尾花粥と云事はらい口口有て七月廿七日の諏訪のみさ山の神事の時尾花を取て置て其を黑やきにして認る也就レ其色々の謂ありといへとも不レ及ニ注世上に是を用て粥をにて尾花粥といへり

御散飯供御調進次第云八月朔日一おはなの御かゆ米をひきわりてこしらゆる也大小のはちに九分め程二ッ參也おはなをくろやきにして御かゆの中へ入てよくまぜてうすすみ色にして參るなり

○初鱒

蜷川親元記云文明十七年八月四日壬辰朝倉方より初鱒一尺東山殿へ進ニ上之一

○初鮭

殿中申次記云八月朔日初鮭一折例年進ニ上之一禁裡樣へ參佐々木四郎三郎

○初雁

殿中申次記云八月朔日初鴈一例年進ニ上之一禁裡樣へ參朝倉彈正左衛門尉初鴈一例年進ニ上之一

年中恒例記云一初鴈武衛進ニ上之一月日不レ知レ之一初鴈初鮭武田朝倉進ニ上之一月日不レ定則禁裡江御ニ進上之一春日局以レ文御祝迄被レ申ニ入之一如レ此之物進上之時分必中蔕の文にて候也

宗五大雙紙云公方樣にては八月朔日參る初鴈は中次表にて懸ニ御目一候云々

宗恕聞書云御太刀御馬なとの折紙はひろけて御目にかけす候公方樣へ歳暮に諸大名並御供衆より進上の卷物の目錄をは取揃へて一度に十二月晦日御對面の時いつくも候

へ卷ひろけて御目懸候惣して打樽卷物以下御目にかくる事はなし但八月に參候初鴈は申次面にて御めにかけ申候又二月朔日畠山殿より進上之白鳥一熨斗蛇千本矢野五荷此時にかきり目錄を御めにかけ其後白鳥熨斗蛇御めにかけ申也七月一日十二月一日年中三ヶ度如ㇾ此仍一獻有ㇾ之

蜷川親元記云文明十五年八月廿七日朝倉大御所樣へ初鴈一初鮭一尺進ニ上之一

蜷川親俊記云天文十一年八月廿三日辛丑公方樣初鴈典厩御ニ進上之一貴殿昨日鴈進上

御湯殿上日記云明應四年九月六日むろまち殿よりはつかりまいる

又云天正十六年八月廿七日いゑやすよりはつかんまいる

つかいに一そく一まき下さるくわんしゆ寺日ろう

○初鮭

年中恒例記云八月初雁武衛進上月日不ㇾ知ㇾ之初雁初鮭武田朝倉進ニ上之一月日不ㇾ定則禁裏ェ御ニ進上之一春日局以ㇾ文御私迄被ㇾ申ニ入之一如ㇾ此之物御進上之時分必中臈之文ニテ候也

蜷川親元記云文明十五年八月廿七日丁亥朝倉大御所樣へ初雁一初鮭一尺進ニ上之一

御湯殿上日記云明應四年九月十日むろまちとのよりあか鮭御まなはしめてまいる

又云永祿六年九月十四日ふけ義輝公よりはつさけまいる

○初鰤

御湯殿上日記云永祿八年九月十五日さよりはつふりまいる

○十五夜

吾妻鏡云仁治二年八月十五日庚午今夕天迎ㇾ霽被ㇾ上ニ階間御簾一將軍家令ㇾ翫ニ明月一御

つれ〳〵草云八月十五日九月十三日は婁宿なり此宿清明なる故に月をもてあそふ良夜とす

年中恒例記云八月十五日明月御祝參於ニ内儀一也茄キコシメサルヽ枝大豆栃栗瓜茄美女非上ナリ調ニ進之一御イモ御カユ茄大草調ニ進之一

眞俗交談記云八月十五夜名ニ桂開會一九月十三夜名ニ繼華會一

續無名抄云八月十五夜の月を賞する事もろこしにては李唐より專起りたる事也婁宿に當りて必清明なるへきに必くもるなりされは凝壞集に邵康節中秋の吟に一年一度中秋夜十度中秋九度陰

蜷川親元記云文明十五年八月十五日乙亥水主三郎左衛門尉親信方より名月の芋四籠進ㇾ之

○菊ノ着セ綿

後撰集云となりにすみ侍ける時に九月八日いせか家の菊はわたをきせにつかはしたりけれは又のあしたにおりてつかはすとていせ

數さらす君かよはひをのはへつゝなたゝる宿の露となりなん返し藤原雅正

露たにもなたゝる宿の菊ならは花のあるしやいくよ成らん

紫式部日記云九日菊の綿を兵部のおもとのもてきてこれとのゝうへのとりわきていとよう老のこひすて給へとの給はせつるとあれは

菊の露わかゆはかりに袖ぬれて花のあるしにちよは讓らん

年中恒例記云九月八日今夕菊を御庭ニ栽申也三所ノ者役也今夜菊に五色のわたをきせらるゝ也御藏より參るを中臈衆こしらへ被ㇾ申候て如ㇾ此也同くゝりたる菊を十二月迄被ニ置申一也三所の内松に御太刀被ㇾ下同朋役ㇾ之

伊勢貞助雜記云重陽にきせわたと申事御座候哉御庭に菊をうへて菊の上にわたを置候其わたも五色にそめ候御庭の者の役にて候多分御對面のまへの御庭に仕候よし也

武雜記云九月九日菊の花是もゑやうか耳のあたりに菊の花のことく黄色にひかりて有を菊の花によそへ賞翫候耳のそばにあたる間きくの花と申儀なり

世諺問答云菊にわたきする事いつの頃よりはしまるとも見へ侍らすたゝ菊をもてあそふのあまりに寒霜をふせかむとのこゝろさしとは覺へ侍る

○菊酒

年中恒例記云九月九日同し從ニ今日一小袖也御祝御酒は菊花入申從ニ今朝一御かゆやきくり九こふ九きれ百日參候也

○貝足祭

蜷川親俊記云天文十一年九月九日丙辰鞍馬御神事見物之參詣之具足祭公方樣御具足出ㇾ之

○十三夜

躬恒集云延喜十九年九月十三夜そのえんせさせ給へりその心のたいあり人々歌たてまつるに

百敷の大宮なから八十島を見る心ちする秋の夜の月

新古今集云九月十三夜月くまなく侍けるを詠あかしてよ

武家名目抄稿第百八十七册

塙檢校保己一編

歳時部三之一

○火爐開

伊勢貞助雜記云殿中御火爐ハ九月晦日に開爐にて三月晦日にふさき申也御作事方奉行申二付之一多分常始被レ申二付之一惣別御ゆるりは常御所に一つ御座候御對面所にはちうしやくの御火鉢を被レ置候十月朔日より火をおき申也御立炭なり三月中も置申也但年によりて三月三日より火をは不二置申一事も有レ之開爐閉爐塞爐とも申云々閉はとつる是は不審也

○北野御經御成

年中恒例記云十月五日北野御經へ渡御先松梅院へ御成アリテ御裝束ヲ被レ改經堂へ渡御松梅院ヨリ經堂へハ御ハリ輿又還御ニ松梅院ニテ御直垂ヲメサレテ一獻參ル日野殿三職以下御相伴衆祗候御警固所司代今日ノ御成ヨリ同朋走衆小者ハハヽキ脚絆ヲ仕也

年中定例記云十月五日内野の經のひもときに御成先松梅院へ御成

みける道信朝臣

秋はつるさよ更かたの月みれは袖も殘らすつゆそ置ける

源氏明石の卷云十三日の月の花やかにさし出たるにたゝあたら夜のと聞えたり

中右記云保延元年九月十三日今夜雲淨月明是寛平法皇今夜明月無双之由被二仰出一云々仍我朝以二九月十三夜一爲二明月之夜一也

年中恒例記云九月十三日明月御祝參於二内儀一也茄キコシメサル御祝調進儀八月十五日ニ同

本朝無題詩云月下有レ感法性寺入道殿下□□月清十三夜天冷星稀叶二四望一斜影訪レ窓臨二曉枕一餘輝繞レ壁滿二秋堂一

さて經堂へ御成にて其より直に鹿苑院へ御成經は朝經過て御成也經堂に棧敷南北にあり北は御臺樣南は公方樣云云

宗五大雙紙云公方樣御小者もゝは、き脚半は十月五日内野の御經へ御成より三月三日迄被レ用候

走衆故實云十月五日より三月三日までゝきやはんもゝは、きをする御きやうより以前はせすたとひする時なれとも御道に川あり雨ふりてつよくしるけれはきやはんもゝはは、きをとる也

○亥子餅

○ナリキリ

○ナレキリ

○マイリキリ

○玄猪

○嚴重

政事要略云藏人式初亥日内藏寮進二殿上男女房料餅一各折櫃内藏所レ進餅已是人給料但又大炊寮出二渡糯米内膳司一備二調供御一雖レ不レ載二式文一寮司供來尙矣群忌隆集云十月亥日食レ餅除二万病難一五行書云十月亥日食レ餅令二人無レ病

鎌倉年中行事云亥ノ子ノ餅之事御祝亥ノ時也白餅赤豆餅黑餅衝重ニ積テ胡麻ノ粉小豆ノ粉栗ノコフチタカニ紙ヲシキ三種ノコヲ三所ニヲキテ御前ニ置也松ノ木ニテリウコノセイニウスヲ作リテ柳ノ木ニテキヂヲ二本作强飯ヲウスニ入三種ノユヲカケテキヂ二ヲヲシメ口へ右ノ手ニトリテ女ハイノチツクサイワイト三キネツイテ食ヘシヲトコハイノチツクツカサト三キネツキテ食ヘシ白强飯マイル也

又云亥子之御祝三度アル時ハ三度ナカラ御祝有レ之御成切管領ヨリ以レ使可レ被レ下由被二申上一其使ニ御對面其以後御使被レ遣レ之管領御成切直ニ請取有二頂戴一御使ニ御一獻其後被レ出二太刀一飯參シテ其由ヲ申上自餘ノ外樣ヘハ近付方々申出シテ被レ遣レ之奉公中在鄕ノ方々御亥子之御祝ニ多分參上アル也

年中定例記云十月亥の日暮過ておもてにて御祝參其樣ちいさき餅五色なるを角の折敷につみてさきに五色の粉すはり候又前のことくの餅を二三百御四方につみたるかまいるさて面々一人つゝ御參候へは其おほき餅を一ツ御取候てそと御口にあてられてまいらせられ候餅をたまはられ候て頂戴候てくひ候か能候由貞宗申され候つる懐中したるかよきといへり又わろしとも被レ仰候人によるへし

禁裏様御源猪のつゝみ紙を一番に傳奏御持參にてひろけて被レ參候へは御頂戴候其次に傳奏御給候國々又御不參候大名國持衆は御源猪を申出され候女中よりつゝみ候て御出し候急度したる方へは下給のつゝみ紙につゝみてその上を杉原にてつゝみ候て御出候中臈の御役なり大方の衆へはきりはくの御つゝみ紙其外は引合也つゝみ樣あり

觀世大夫には下給のつゝみ紙にて候申次遣レ之

年中恒例記云十月能勢餅ノセ善法寺當月亥日コトニ進上之御臺樣ヘモ參也今月亥日コトニ御ケンテフ各拜領之云々昔ハ禁裏樣御ケンテフ公家衆被レ參候時傳奏持參候テ御頂戴也近年ハ先一番ニ御頂戴候也

又云御嚴重包樣事三色ニ在レ之一ニハ給二ニハ切箔三ニハ白紙也先給ノツゝミ紙ノ事角ノ折敷ニ物ノ葉ヲ敷テ御嚴重ヲ一スヘテ給カキタル引合ニテ包（ツゝミ樣口傳在レ之）其上ヲ引合ニテウワツゝミアリ香包ノ樣ニ包也此ウワツゝミニ給人ノ名ヲ書也次切ハクノ事假令給書所ニ給ハナクテ切箔シタルカワリハカリ也コシラヘ樣ハ給ニ同次ニ白紙事假令給書所之給ヲモカゝス切ハクヲモセス白紙ニテ包也白紙ノニハウワツゝミト云事ナシウワツゝミナキ間名書モナキ也給切箔ノコトク角ニ葉ヲ敷御成切一スハリテツゝムマテ也三職斗常ノ角ニテハナクテ大角ニスワル也三職女中同前又三職以下コトゝク上包ニ名書アリ但仁木ニカキリテ名書無レ之御嚴重ノ下ニ敷ク葉ノ事一番ノ亥ニハ石長生（シノフ）ト菊花タルヘシ二番ノ亥ニハシノフト紅葉楓三番ノ亥ニハシノフト鴨脚（イチフ）ノ葉ヲ敷也給ニモ如レ此一番ニハシノフト菊二番ニハシノフト紅葉三番ニハシノフト鴨脚ヲ泥白テイニテ書也又切薄モ銀箔ニテモスル也ツゝミ紙以下用意事中臈衆ノ役也ウワツゝミノ名書ハ上臈ノ役也云々給切薄ナトハ土佐調ニ進之御成切ハキントンノ樣ナル餅也御美女方ヨリ參諸下行ハ實子カケト云テ倉役ヲ相懸以ニ納錢一被レ仰ニ付之一

花園院御記云正中二年十月十日丁亥今夜亥子餅如レ例今日親王所レ飼犬被レ遣ニ關白許一（此犬母在ニ關白許一之故也）返進之時頸玉付レ歌（香薄樣）被詠云

たひ人のあさたつそてもしほるなりきりほしわふるのちのさゝはら」自ニ永福門院御方一給レ之云是折句歟沓冠歟

將又隱題歟未ニ讀得一試可レ讀也云々即思案今夜當ニ亥子一夜なりきりほし歟之由申レ之了即親王成切餅一畳薄樣敷遣レ之不レ被レ遣ニ返歌一也女院不レ被ニ御覽一出之處予讀出高名也

掬鳴曉筆云先萩は宮城野の露とぬて花の下紐うちとけたりしか明行風にもまれつゝちり行處を草かりのねりそにからめとられ（中略）又景行天皇はたちあまり三とせの冬神な月のはつゝの日かはもちゐにその名をうはゝれしうたてさ誰かわしらぬ物やはある

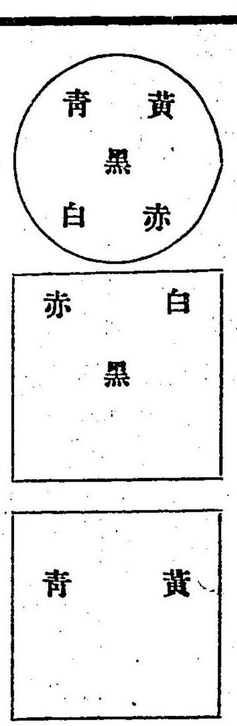
建内記云嘉吉元年十月六日己亥今夜亥子也禁裏御食切付ニ勾當内侍一申ニ入之一成房分同所ニ申出一也室町殿御分當年初度例日也予一向未レ申ニ出之一間内々可ニ申入一所存也翌日付ニ靈雲庵一内々申尋慮之處當年未ニ申出一候自ニ明年一可レ申云々十八日辛亥今夜亥子也禁裏御食切付ニ勾當内侍一申出了成房分同所レ被レ下也祝着々々室町殿御分當年初度之間依ニ例日一（當年十月例日（赤口舌日事）在ニ己亥日一也）不レ被レ出レ之自ニ後年一可レ被レ出レ之

室町殿年中行事云十月就ニ御玄猪之御祝儀一酉剋將軍出ニ御子御對面所（御裝束同レ先）御供衆申次御禮如レ常

慈照院年中行事云十月二日御目見規式如ニ毎月一就ニ御玄猪之御祝儀一酉剋將軍家出ニ御子對面所一御供衆申次御禮如レ常當番申次出ニ子國際一御相伴衆ト披ニ露之一退時皆一同出座奉レ賀レ之則御右方列侯御本膳幷數餅（各殿ニ四方一）備ニ御前一然後當職ノ人出座御手自賜レ之謹而拜ニ戴之一退テ食シナカラ退出自餘同前次國持衆准國主一人充出御手自被レ下レ之作法同上於レ是御陪膳衆數餅ノ御膳ヲ持退闕内二盃目ニ置退出ノトキ外樣衆一人充出テ取レ之頂戴シテ退至是數ノ餅退別ノ數餅（戴ニ四方一）置ニ子先所一退テ後御供衆御部屋衆申次番頭節朔衆上池院一人充出テ拜ニ戴之一規式如レ常

殿中申次記云御亥の子の御祝の樣體の事一番に二の御盃參候二番にくろき赤白三色の御嚴重かくの折敷につませ候て三ならひ御四方にすはりて參候又同かくのおしきに黄なると青きと二ならひて御四方にすはりて參候三番につく〳〵御四方にすはりてなかほそは御はしのすはり候ことくに御まへにをかれ候何も一度にまいり候て御祝の樣體常のことく御座候てやかて御てうし參候三の御盃は女中衆はかり御いたゝき候御けんてうの事は御てつからみな〳〵に下され候四番目にのし四方にすはりて參候さて御てうしまいり候つく〳〵の上にをかれ候五色のこはくろきをなかにをかれ候つく〳〵は御ひと御所樣はかりまいり候

つく〳〵の上になかれ候



御四方の上にすはり候三すはり候なまつまいり候てのちに二すはり候か塗候

かくの折敷にしのふ菊をかいしきにして御けんてう十七八廿はかりほとつみてうつくしくきくしのふにてかさり候つく〳〵にはくもはくのやうにゑとり候て菊しのふなと繪にかきて金はく白はくにてうつくしくゑとり候何も五色にさいしき候なかほそもつく〳〵のことく時々の繪をかゝれ候一番の亥にはきく二番は紅葉三番はいちやうにて何もうつくしく色とり候御けんてうのつゝみ紙にはきくしのふをちうていしろていにてときゝの繪をかゝれ候

御事始記云十月ゐのこ御成切之事公方様御直に被下方へは其分にて候又御直に不被下方へは御前之御成切過候て五ヶ番へ御なりきり四方にすはりて一膳つゝ五ヶ番へ被出之五ヶ番へ月行事あり祇候請取番子にちやうたいさせ申候又奉行衆には公人奉行祇候仕候て請取申是も各に頂戴させ申候也毎年此分にて候也御成切とも申又御殿重と申也

康富記云寶德三年十月十日參勸修寺殿入見參及雜談漸可被參公方亥子御祝之由有支度早退出了今日亥子御祝諸大名以下出仕人々酉剋云々

長祿二年以來申次記云御ゐのこ出仕之事公家大名外様御供衆御部屋衆申次番頭節朔衆上池院御對面同御殿重頂戴次第事三職大名外様衆御供衆御部屋衆兩人申次番頭節朔衆上池院公家御對面所へ御出座之時御供衆申次さいのきはへ伺公候而御禮申儀同前也其後申次さいのきはへ又參て面々と申入て三職以下御相伴衆一列に御前へ被參候て御禮被申て其儘御對面所のさいの内へ御前の右の方に各着座候なり扨ゐのこの餅居たる本御膳四方參又別に餘多積申候御膳參仍二膳なり凡繪圖にあらはすなり

管領を始としてかやうに一人充被參候處に直に被下候扨頂戴候て口にをし入てたへ〳〵御前を被退出候なり御相伴衆國持外様同准國持細川陸奥守京極加賀守うち續てまいる直に被給之頂戴候也其後頓て其御膳を御配膳の人御供衆の

內也參あけ申候て御前御通りさいのきは間牢斗內に被置申處に外様衆又一人充被參候て御膳にすはりたる餅をわれと一充給て頂戴候て被罷退也國持に不准外様衆はかやうに直には不被給候間時宜此分也其後御通りに置申御膳を御配膳之人參候て則かけへ取て又新敷別に御膳にせんまいる然はこと〳〵く皆御膳之數三せん也此三膳めの御膳まいりたる時御供衆一人宛被參直に頂戴也同御部屋衆兩人宛申次衆一人宛參候て直に頂戴也同番頭節朔衆一色阿波守小笠原結城千秋三上榊葉上池院迄參て直に被下候を頂戴也其後申次さいのきはへ參て公家と申入て則傳奏禁裏様の御けんてうを御硯のふたに居たるを御前へ持參候へは御所様御頂戴在之頓て傳奏には自分のを直に被給頂戴候て禁裏様の御けんてうをも御硯のふた共にもちて御前を退出候處に相殘候公家一人充被參候て何れも直に被給頂戴也此分終り候て申次さいのきはへ參候てまうと申入候へは常之御所へ還御成也吉良殿石橋殿澁川殿なとは不及被參以雜掌御殿重被申出也大名衆なと不參候て以雜掌御殿重被申出候時御末より申出候其様はつゝみて頓て其儘包紙の上に其人の名を女中にてあそはして御出候其儘於庭上雜掌に申次渡候上様の御殿重は御盃のことく御末へ參られて頂戴なり

長祿年中御對面日記云二月晦日禁裏様より被參候御殿重をは傳奏公家中にて被參候時被持參申候也如此之段もと〳〵よりの御様體也然に惠口院殿様御代禁裏様御殿重を一番に御頂戴ありたきよし上意にて面々よりもまへに傳奏へ申入て被參候なり其分至今無相違にて御膳は已上三膳まいるなり御配膳は如常御供衆勤役なり

又云二月晦日御亥子諸家出仕樣體事御對面所へ御出座にて則申次御前へ參面々と申入候て則三職以下御相伴衆之大名一列に御前へ被ㇾ參着座にて御膳まいる同二の御せんもまいる左樣に候て三職以下一人つゝ直に御給候て直退出なり次に國持の外樣同打つゝきて被ㇾ參如ㇾ此其後二の御膳をあけ被ㇾ申候て御とおりにをき申て常の外樣一人つゝ被ㇾ參候てわれと御せんの御なりきりを給て頂戴候て退出なり如ㇾ此ありて御とをりにをき被ㇾ申たる御膳をかけへ被二取申一候也

武雜記云御成切拜領之事主人御取候て御心にあて被ㇾ下候左の手の上に右を重て拜領候て頭の間か又御緣なとにて能々食候懷中なと候事惡敷候

伊勢貞親以來傳書云十月いのこの御なり切之事公方樣御直に被ㇾ下方へは其分にて候又御直に不ㇾ被ㇾ下方へ御荷之御成切過候て五ヶ番へ御成切四方にすはりて一膳つゝ五ヶ番へ被ㇾ出ㇾ之五ヶ番之月行事有ㇾ伺候請取之番子にちやうたいさせ申候又奉行衆には公人奉行伺候仕候て請取申是も各にちやうたひさせ申也毎年此分にてなり御成切と申也御殿重とも申也

伊勢貞助雜記云御亥子の御けんてう親世大夫にもつゝまれたるを被ㇾ下哉事親世大夫にも諸大名拜領のことく繪をかきたるを被ㇾ下候又上つゝみに御かき付はなく候御書付候て殿文字をあそはし候は御紋めされ候衆同御供衆へは殿文字候其外は無ㇾ之候もと〳〵は御供衆へは御かきつけ候はぬ由候近年は御座候

伊勢貞明覺悟記云十月亥子には男女共に紫の小袖を被ㇾ用候也

宗五大雙紙云十月ゐのこの時御まいり切とてきんとんのやうなる餅參候それを直に面々其外人によりて御給候又不ㇾ參時諸國又御前にてえ給候はぬ人の方へ申次して申出され候其つゝみ紙にけちめ候大名衆其外國大名きつとしたる方へは下繪の帋に包まれ候大名の人へは切はくの紙につゝまれ候末々は引合一かさねにつゝまれ候包の樣候親世大夫には大名のことく下繪の紙につゝまれ候包み候事上臈の御役にて候つゝみ帋のうへは又杉原ひとかさねにて御包候て御出し候申次取次候てかた〳〵へまいられ候

私刀記云いのこ御なり切ちやうたいの事公方樣御取候て御口をそへられ候て被ㇾ下候を給候ていたゝき申則受用仕御前を罷立候御前にて皆たへ候はてくゝみて退出候て御次の間にてたへたるかよく候御前へはやく參候もいかかにて候又おそく參候てまたせ申候もいかゝにて候此仕合大事に候公方樣にかきり不ㇾ申大名方も此分にて候いのこの出仕にはむらさきの小袖可ㇾ然候女中衆も各御用候也女中衆のはくれなひうら男衆のは白きうらにて候又依二仁體一やかてむらさきうらをも被ㇾ付候是は下々の人は付間數候也御なり切とも申候又御けんてう共申候いつれも不ㇾ苦候

萬しつけ方の次第云十月のゐのこの出仕にはむらさきのこそて本とすへしいつれも此をもむき於二殿中一かくのことくきしきみなみなまなふへし云々

家中竹馬記云亥のこのけんてう拜領のやう右の手を差出し左の手をもちと添る樣にして給ていたゝきて退出す

奉公覺悟記云十月いの子にはむらさきの小袖たるへし男女とも如ㇾ此

蜷川親元記云寛正六年十月十三日丁亥子御祝四御方分調二進上之一

又云文明十三年十月廿二日癸亥御方御所樣之御なり切土岐殿への分翌日兵庫殿被二下之一御なり切事大内殿土岐との御狀あり十七年十月廿一日亥御なりきり三御方分出大内殿土岐殿六角殿

大友興廢記云大友家年中儀式條おなれきり十月の亥の日の御いはひ寒田の家より是を勤大さ三寸廻りねの飾に五色の衣をつけ引合一重に包み菊を一枝つゝそへて亥の日の御祝に伺公の侍に下さるゝおなれきりの御祝と是をいふ也

大館常興記云天文十年十月十二日夜前御いのこ御けんてう公方樣並上樣兩御所さま御分二つゝみ拜二受之一今朝佐方持せ給ㇾ之也使松平也

嘉良喜隨筆云十月イノコニ御マイリ物トテキントンノヨウナルモチヲ直ニ公方被ㇾ下人ニ下繪ノ紙ニツゝマレ候大方ノ所ヘハ切ハクノ紙ニツゝマル御前出ス末々ハ引合一重ニツゝマル親世大夫ニハ大名ノコトク下エノ紙ニツツマレ候コノ役ハ上ラウノナス事ナリ

○柿餅

殿中申次記云十月十五日一柿餅三籠例年進二上之一宇治辻ノ坊

○初鰹

殿中申次記云十月三日初鰹三武田大膳大夫

蜷川親元記云文明十五年九月十七日一朝倉初雪魚二進二上之一東山殿御返事あり

御湯殿上の記云明應四年十月三日むろまち殿よりゆきの

御まなはしめてまいる

○富士御精進

太田康有記云建治三年十月卅日富士御精進自二今日一殊嚴密至二來月六日一不レ可レ有二御沙汰一云々

○初鵠

蜷川親元記云文明十年十一月九日丁卯朝倉彈正左衛門初鵠進上御披露之由御狀あり

武家名目抄稿第百八十八册

塙檢校保己一編

歳時部三之二

○一切經會

吾妻鏡云建保二年十二月十日庚子將軍家御二出永福寺一是依レ爲二恒例一切經會一也

○煤拂

吾妻鏡云嘉禎二年十二月六日己丑霽爲二大膳大夫奉行一召二陰陽師等於御所一歳末年始雜事日時勘二申之一御煤拂事有二相論一文元朝臣申云新造者三ヶ年之内可レ有二其憚一云々親職晴賢等朝臣云先達者雖レ無二指文一皆所二記置一也至二新造一者無レ煤之故歟有レ煤者可レ拂歟云々所詮此條無二證處一然者無二煤拂一御沙汰可レ宜歟之由被二仰出一之間各不レ申二子細一

年中恒例記云十二月晦日御ス、御ナテソメノ事今日有信所へ進士方日ヲ尋吉日ヲエラハセ進士伺候仕テソトス、ヲハキソメ申也サテ御所樣ヘモ三御盃參候テソノ御盃ヲ進士ニ被レ下公方ヨリハ御太刀上樣ヨリハ御フクヲ被レ下候也公方ヘ御太刀金進二上之一進士說

又云御ス、ハキノ道具柄刺(エヂウキ)等ノ拭布一人ニ一色ツ、被レ下レ之御ス、ハキノ道具モサウニモ御倉ヨリ御下行在レ之御ス、ハキノ御餅大草調二進之一

又云十二月廿七日御煤拂在レ之於二内儀一御祝參也御所御會所御厩以下ハ御會所ノ同朋仕レ之上樣御在所ハ御末ノ同朋御末ハ御末男衆幷御末同朋仕也御煤拂ノ御祝參ル雜煮參也御美女方(非上ナリ)ヨリ參也御會所同朋御末同朋御末男衆御美女等於二御末一サウニ御酒給レ之

御散飯供御調進次第云十二月廿七日御煤拂之御祝事一御

すん也當代は五寸五分也(あつさは相應によきやうにするとなり)すいはう一かさねにまめのこつゝみて參る

蜷川親俊記云天文七年十二月廿七日ス、ハキ

○餅搗

蜷川親俊記云天文八年十二月廿六日己巳野洲井餅ツキ到二來之一

○大豆打

濫觴抄云追儺慶雲二年乙巳(文武九)十二月始レ之今年天下疾疫之故也年中行事曰天下有レ事時不レ退レ鬼云々或云慶雲三年丙午始作二土牛一大儺云々

文德實錄云齊衡元年十二月辛巳武藏國賓長人官兵馬九千万人(已上音讀)位置衆諸前後左右一枚以備二驅儺一

延喜陰陽寮式云(儺祭祭文)今年今月今日今時時上直府時上直事時下直府時下直事及山川禁氣江河谿谷二十四君千二百官兵馬九千万疋(已上音讀)位二置衆諸一前後左右各隨二其方一諦定レ位可レ候二大宮内一(留)神祇官宮主(能)伊波比奉(里)敬奉(留)天地(能)諸御神等(波)平久於太比(留)伊麻佐布倍志(登)申事別(氏)詔久(禮)惡(伎)疫鬼(能)所々村々(留)藏(里)隱(布留乎波)千里之外四方之堺東方陸奥西方遠値嘉南方土佐北方佐渡(與里)乎知(能)所乎奈牟多知疫鬼之住(加登)定賜(比)行賜(氏)五色寶物海山(能)種々味物(乎)給(氏)

あたゝけ數廿七參る(大きなる折に包むなり下に檜葉を敷也)あたゝけの大キサ六

罷賜移賜布所所方々爾急爾罷往登追給登詔爾挾二釁心一氏留里加久良波大儺公小儺公持二五兵一氏追走刑殺物曾登閉食登詔忠實按、儀式の祭文もこれにおなし

年中恒例記云御小袖ノ間ニハ大豆ヲ自ウタル、也外ハ役人在レ之常御所已下伊勢守ウチ被レ申候也御スヘハ伊勢同苗初云々節分御館ニウタル、大豆勝栗伊勢守進上也

花營三代記云應永卅二年正月八日己卯節分大豆打役昭心カチクリ打アキノ方申ト酉ノアイ也アキノ方ヨリウチテアキノ方ニテ止云々

臥雲日件錄云文安四年十二月廿二日明日立春故及レ昏景富毎レ室散二熬豆一因唱二鬼外福内四字一蓋此方駈儺之樣也

宣胤卿記云永正十四年十二月十六日今夜節分也打二大豆一

宗長手記云大永六年十二月廿五日節分の夜大豆うつをききて福はうちへいりまめの今夜もてなしをひろ〳〵や鬼はいつらん京には役おとしとて年の數錢をつゝみて乞食の夜行におとしてとらする事をおもひてかそふれは我八十の雜事錢やくとしていか、おとしやるへき

壒囊抄云節分ノ夜大豆ヲ打事ハ何ノ因緣ソ是更ニ憶ナル本說ヲ不レ見由來ヲ云人ナシ但或古說ノ中ニ云節分ノ夜大豆ヲ打事ハ字多天皇ヨリ始レリ鞍馬ノ奥僧正カ谷美曾路池ノ端ノ方丈ノ穴ニ住ケル藍婆惣王ト云二頭ノ鬼神共ニ出テ都ヘ亂レ入ントシケルヲ毘沙門ノ御示現ニ依テ彼寺ノ別當參シ申子細アリ主上聞召スニ明法道ニ宣旨アリテ七人博士ヲ集テ七々四十九家ノ物ヲ取テ方丈ノ穴ヲ封シ塞キ三斛三斗ノ大豆熬テ鬼ノ目ヲ打ハ十六ノ眼打盲抱テ飯ルヘシ又聞鼻ト云鬼人ノ食ントスルヲハ鮟ヲ炙串ト名付テ家々ノ門ニ指ヘシ然ラハ鬼ハ人ヲ不レ可レ取ト云御示現也ト云々

今川大雙紙云節分の夜の鬼の大豆をも御年男きんする也

風呂記云十五日迄ハ何事も祝の事は年男の役也節分の夜の鬼の目も同前

櫻陰腐談云客問曰人到二除夜一門插二鰯頭狗骨葉一此華戎一樣之儀也不レ知漢地有二此式一否答曰此惟朝鼎代之風耳蓋大戟有二戶端一故備下防二邪氣一術上如二壒囊抄一也鰯頭亦是儺磔爲レ攘二厲鬼一之儀也

羅山詩集云除夕詩國俗擲二燒菽于四隅一唱二福内鬼外之辭一蓋是漢儀之遺法粗見二後漢禮儀志註一既而人皆筭レ豆比レ齡添以二一粒一而一口喫レ之余年已一甲子有五室人數レ之授レ余則盈レ掬我齒落早有レ年故除二甲子數一其餘單僅六粒滿レ口

移レ刻豆皮粘逗不レ能レ脫レ粒漸摧破如レ嚼レ沙不レ能レ咽乃俾二婢代喫一焉一招レ福送レ窮隨二俗情一手中熬豆暗投輕振童唱擧二白頭一和只有二儺名一無二佛名一

○年忘

關八州古戰錄云太田三樂源抑小田城錄常州ノ小田讃岐入道天庵其家ノ吉例トシテ毎歲臘月晦日ノ夜群臣ヲ集テ連歌ノ會ヲ促シ百韻興行シテ是ヲ年忘レト號シ酒宴曉天ニ至ルヲ定式トス

○日蝕

吾妻鏡云貞永元年四月一日今日可レ有二日蝕一之旨宿曜備中法橋依レ申レ之可レ被レ裹二御所一否以二周防前司親實一被レ問二曆道一各不レ可レ有二日蝕一之由申レ之

又云寬元四年正月一日辛卯今日申酉間可レ有レ蝕之由諸道雖レ申レ之窮冬有二其沙汰一任二右大將家建久九年正月朔日蝕時之例一不レ被レ裹二御所一隨而又蝕不二正現一若他州事歟云々

年中恒例記云年中日蝕月蝕ノタヒコトニ御殿ノムヂヲ三所計コモニテツ、ミ申也檜皮師ノ役公人相副也

○日待

天水抄云永祿四年十月十五日に江州北郡淺井備前守正慶日待之刻十四日より十六日迄に千句の連歌興行有御湯殿上日記云天正八年十月十五日こよひ御日まちにてしん大すけとのより口きの御ふたまいる

家忠日記云天正六年四月十二日癸巳日待候會下へ振舞候

又云八年正月十九日庚申會下にて日待候益藏主青藏主に振舞候

○月待

蜷川親俊記云天文七年正月廿七日戊戌眞如堂へ禮罷以レ次月待拜レ之畢淵田與五郎窪與九郎同道松泉院被レ成レ之

又云天文八年正月廿三日壬辰眞如堂にて月待連歌あり二月廿三日壬戌月待之三上與次郎浮堂彥六河田彌三郎伽喚之

○子祭

蜷川親俊記云天文七年十月十八日戊子子マツリ行レ之

又云天文八年九月晦日甲子子祭レ之

○庚申待

○申待

蜷川親俊記云天文七年六月十八日庚申眞如堂にて申待十

月廿日庚申野洲井所にて申待之
又云八年二月廿一日庚申觀世大夫昨日御禮まいる申待浮堂彦六伽喚之
又云八年四月廿二日庚申申待河田二郎左衛門浮堂彦六來之
義殘後覺云或時信長公庚申待ヲ仕給ケルニ御伽ノ人々ニハ柴田修理亮瀧河一益佐久間明智ヲ初トシテ諸侍二十人許御伽ニテ終夜酒宴亂舞ニテ遊給フ
○御誕生日
鎌倉年中行事云御誕生日ハ五山十刹以下ノ寺々ヨリ御祈禱疏之銘維那持參アリ御名乘被レ遊有二御出一ノ後寺々維那ニ御對面御誕生日ハ毎月大御所へ有二御出一御臺御酒數獻參殊更正御誕生日ハ終日御酒アル也
年中恒例記云御誕生日コトニ御アラヒヨネ御所々ヨリ參在富有春御身固在レ之毎月ノ事也
花營三代記云應永廿九年十二月廿四日有二御社參一爲二御誕生日一間法樂舞アリ神馬二匹引レ之則舞被二御覽一自二大御所樣一御計也
建内記云嘉吉元年六月十三日戊寅室町殿正御誕生日諸寺御祈禱
蜷川親元記云文明十年正月廿二日乙酉御祈禱當月より疏銘七郎殿（良綱突未）今日御誕生なり
大館常興記云天文九年二月四日今朝於二殿中一在富卿有春朝臣參會御弟若公樣御誕生日にて御身固の爲に兩人祗候云々
又云天文九年三月三日攝州門外まて來臨明後日（五日）公方樣御正誕生日にて毎年御うふすな（江州三大寺也）御代官を被レ參候毎度飯川彦九郎被レ參候得共近日暇を被レ下若州へ下向云々
○御精進日
○御精進解
鎌倉年中行事云四月朔日三島御精進タル間アイ火以下可レ有二斟酌一方ハ不レ被レ致二出仕一御一家御一人爲二御代官一別テ有二御精進一同八日瀨戸三島大明神臨時ノ御祭禮公方樣御社參中之酉ニハ本社三島ヘ爲二御代官一月輪院出世一人有二參詣一仍毎年御精進中御自筆ニ被レ遊タル紺紙金泥ノ心經三卷御神馬七匹此内伊豆走湯權現箱根三所權現ヘモ被レ進御一家ノ御代官ハ瀨戸ヘ參詣有下向被レ參ハ聽テ御精進過也
年中定例記云御精進の日は必松梅院精進の御をり三合進上申御精進のあくる日は大名御供衆より美物御進上

季瓊日錄云永享九年七月五日自二今月一毎御精進日可レ獻二儀爲二御祈禱一可レ被二執行一候然者御精進代之事は圓明に可レ被二仰付一候
○御衰日
○御德日
吾妻鏡云治承四年十月廿七日丙午進二發常陸國一給是爲レ追二討佐竹冠者秀義一也今日爲二衰日一之由人々雖二傾申一去四月廿七日令旨到着仍領二掌東國一給之間不レ可レ及二日次沙汰一
又云建久元年十一月六日丙辰甚雨凌レ兩雖レ可レ有二御入洛一依二道虛並衰日一延引令レ逗二留野路宿一給云々
拾芥抄云生年衰日子午生（丑未生子午）寅申生巳（卯酉生辰戌）辰戌生（卯酉）巳亥生（寅申）假令子年子時誕生人子日子時針灸忌レ之可二推知一又和氣嗣成朝臣云子午生人以二丑未一爲二衰日一之說所レ用也奥書說不レ用也（義政）
年中定例記云公方樣東山殿御德日うしひつしの日は大名國持御供衆よりうしの日は餅一折御太刀（金）御進上ひつしの日は杉原十帖御太刀（金）まはり〳〵に御進上
季瓊日錄云（永享七年八月廿一日）可レ賜二天龍寺命一子院主一之事與二勝定院主一可二相計一之旨被二仰出一反命以爲レ然廿二日則御德日之故可レ以二廿三日一命レ之由被二仰出一

又云延德二年正月十五日遣二昌子於在通宅一云來十八日寺家御成始之吉凶如何又廿五日吉凶如何十八日尤吉也廿五日亦可也云々新相公御德日卯酉大御所御德日丑未在通宅以送レ之二月廿六日今晨遣二昌子於在通宅一兩御所御支干正御誕生可二記賜一者爲レ幸大御所樣五十二歳丙未正月十八日御誕生御德日丑未御所樣廿五歳丙戌御誕生七月廿九日御德日卯酉如レ此皆以送レ之命二昌子一寫レ之以送

康富記云文安元年七月廿九日室町殿御衰日子午也仍昨日大略近習方輩八朔之御禮被二進納一云々先々今日進上之衆者昨日早被二進納一之者也御扇一本枕一對杉原十帖以上記錄裏二在レ之

澤瑞阿彌覺書云丑未御德日御進物事丑の日は餅大折一合大豆粉を引合は包わきに置なり信濃國進百疋未の日には御太刀一腰金杉原十帖御目錄無レ之

蜷川親元往年記云御德日公方辰戌貴殿御母上樣子午武庫卯酉備州子午云々若君樣新造御所へ成去十四日より御所樣御座若君樣御馬にめし初之後御馬にて御成今日初也御德日也仍正三位在盛方へ御尋御使蜷川殿人御德日くるしからぬ由申候仍御馬にて成御て候以下御方衆かちにて供奉

大館常興記云天文九年三月廿四日若州三宅庄事一昨日豆州來臨その御返事昨日は公方樣御德日に候間今日以二一紙一申レ之云々

○御物忌

吾妻鏡云貞應二年五月十四日若君御物忌也物忌字注レ札付二御簾等一護持僧都大進僧觀基參籠三條藏人親實云禁裏仙洞或者被レ置二御物忌札一之上不レ憚二人出入一之由雖レ申レ之奥州固可下令レ忌給上之旨被レ申之間臺下番衆並侍大番勤仕之輩者可二參籠一其外人々出入一切停二止之一向後御物忌可レ守二此式一之由云々

年中恒例記云五月七日御物イミ在富卿有春朝臣調二進之一

○御方違

吾妻鏡云建保元年八月一日己巳將軍家御所作事之間有二御方違一渡二御東殿尼御臺所御弟依レ爲二御本所一也相州大宮令等被レ參云々

又云建保五年十二月廿五日戊辰入レ夜將軍爲二御方違一渡二御于永福寺內僧坊一公氏役二御劔一相模式部大夫結城左衛門尉朝光山城判官次郎基行等候二御供一云々

又云安貞二年四月廿五日今夜將軍家有二五月節御方違一而入二御生西之家一

又云安貞二年十月十四日今夜竹御所爲二御方違一渡二御陸奥四郎政村亭一女房數輩候二御共一云々

又云仁治二年十一月四日丁亥將軍家爲二武藏野開發御方違一渡二御于秋田城介義景武藏國鶴見別庄一云々

又云建長四年十二月廿七日丁丑立春節分御方違事御惱餘氣未レ令レ散御之間渡二御々所西對北妻一云々

建治三年記云正月八日晴御所爲二御方違一入二御宇都宮下野前司亭一今日被レ立二御所西南御門一云々十二月廿七日晴評定若早旦被レ召之間馳參自二夜前一爲二方違一入二之處云々御粗綱山內屋形

鎌倉年中行事云御方違ハ千貫之煩也

在盛卿記云長祿二年閏正月廿九日御方違時剋之事經々雖レ有二多祝一家傳之習以二丑寅二剋一爲二昨今之境一仍御方違事不二御待明一寅一時者不レ可レ爲二御方違一之分然者子丑時分渡御卯初剋還御尤可レ然候哉今時日出卯二剋也以二此分一可レ有二計御用一歟閏正月廿九日刑部卿

又云長祿二年三月十六日今日御所樣四十五ヶ夜御方違也本所御所伊勢守許也石清水八幡宮御參詣日飯尾下總守奉今月十五日癸卯廿三日辛亥廿七日乙卯

蜷川親元記云文明五年八月四日癸亥若君樣爲二御方違一北御所へ御成御馬にめす貴殿御供一夜御座貴殿御宿直

蜷川親俊記云天文八年正月八日丁丑公方樣御方違庭田殿御供大館左衛門佐持木貞孝

○赤ノ日

○赤後

年中定例記云赤の日は御供衆出仕もなし御公事も披露なし赤の次の日赤後の出仕とて出仕あり惣ていにしへは御供衆は赤ならぬ日は日々に出仕候し

年中恒例記云赤後ノ出仕在ノ時ハ諸大名以下公家衆モ少々御參也赤後ノ出仕ハ毎月此分也

長祿年中御對面日記云正月四日一公家大名外樣幷大外樣御供衆申次惣番衆奉行衆出仕(中略)右御對面之次第は一番に御身固と申入て有宣在通參勤二番に外樣少々番頭幷赤後に參賀之公家三番に大外樣惣番衆奉行衆上樣御被官一兩人幷勢田判官大膳助加治等番方につゝきて懸二御目一也

齋藤親基記云寛正六年十一月十八日雖レ爲二赤後一依二御精進一無二番伺事一

文明十一年記云二月三日赤後出仕有レ之公家日野殿御參候へ共不參御歡樂云々大名細川殿山名殿一色五郎殿赤松管領畠山殿は依二歡樂一不參云々外樣赤松又次郎此外御供衆被レ參也各對面在レ之

192
55

192
55

故実

武家名目抄

192
55